Joker oF Way

相野里緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｊｏｋｅｒ　ｏＦ　Ｗａｙ

【Ｎコード】
Ｎ３３１５Ｌ

【作者名】
相野里緒

【あらすじ】
生きる霊。悔恨に追われ、激情に駆られ、ただの一人とその想いを救うべくしてこの身一つ捧げる霊媒師。そして、“とおく”へといってしまった幼なじみを、闇の中から連れ戻そうと奔走する少年。守りたいものはなにか。

筆力もそれはもうひどいもんですし、不定期更新となると思いますが、色々な方に読んでもらいたいです。

第零部　因果（前書き）

二、三分で読める量だと思います

第零部　因果

第零部「因果」

――その日、私にしては珍しく、大通りを自家用車で走った。ほんの気紛れである。気分が良かったのかもしれない。
家族と一緒だった。後ろには五歳になったばかりの息子とほんのりとお酒に潰れた夫。彼らの前には運転席に座る私。
後部座席からの談笑に、時々振り返りつつ私は関わった。「今日は楽しかったね」と、「また行こうね」と。とても楽しかった。ちょっとした家族との一時に幸せを感じていた。
――ほどなくすると車がぶつかって来た。
あまり聞く機会のない、鈍い衝突音。無いようで在る、交通事故。幸せの空間が、一瞬で悲劇へと変貌した。
私には、きっと最期であろう家族との繋がりがわからなかった。意識が途切れていき、気絶した。

――鼻孔を煙ったい空気がくすぐった。
目が覚めた時、眼には真紅の空が飛び込んできた。
絶えず揺らめく紅色の空は、あまりにも近くにあった。手を伸ばせば届きそうなほどに。
噴き上がる衝動に突き動かされ、私は腕を頭上に上げた。
熱かった。焼けるような熱がひしひしと腕に伝わってきた。
「――……。……。」
声が出なかった。言葉が見つからなかったせいか、それとも喉に走る鈍い痛みのせいか。

しばらくすると、何かしらの音が聞こえてきた。不規則で、胸が痛くなってくる音。もっと、具体的に言うのならば、子供の泣きじゃくる声。

と、もう一人――。

「ねぇ、キミ……？　もう大丈夫だよ。私が、キミの傍にいるよ……？」

若い、透き通った少女の声。　それが気になった私は、挙げていた熱い腕を下ろし、仰向けの体の、頭だけを右に傾けた。

揺らめく大きな炎が見えた。綺麗、と思うほどの存在感がそこから漂ってきた。

紅い炎の根元には、黒こげの鉄塊。車体の形状に似ていたが、ひどく捻れていた。

周囲を囲う、うねる炎の海の中心に、少女と少年はいた。

十歳代後半くらいであろうしゃがんだ少女は、腰まで届く長く真っ白な髪を有し、それが紅い光を反射する姿は、妖しく美しかった。

少女は、まだ小学校低学年に見える少年を胸に抱き、「傍にいるから。ずっと、傍に……」と、繰り返し告げていた。

「こ、こばやっ、こばやじっ、やじっ、……っ、うっ、うっ、ごばやじぢゃんっ、だっ、だいじょっ、ぶっ……？」少年が喘いだ。

衝撃が体内を走る。私は急にその少年を抱きしめたくなった。

少年に近づくため、動かぬ体を無理に動かそうと体を捻り、うつ伏せになった。

何だかわからない痛みが体を突き抜けた。

「あっ……ぐぅ……」

苦しい喉から勝手気ままに出た言葉。

すると、こちらには関心を一切向けていなかった少女が、初めてその存在に気づいたように私を見た。

少し驚いたようだ。そんな顔をしていた。

驚いていた少女は、私と眼が合うと妖艶な笑みを浮かべた。胸元の少年を横から覆うようにして、より強く抱きしめた。

「やっと起きたのね……。いつまでも動かないから死んじゃったのかと思っちゃった。フフフ」少女が言った。
どうしてだか、ひどく、少女の存在が儚く感じられた。
少年を抱いたまま微笑を止めない少女に、使い辛い喉で話かけた。
「あ……。あな、た、は……、誰……？」
背後の炎で濃くなった影を纏わせた少女は、少年を離さないように再び抱きしめ直して言った。
「――アリサよ。私の名前はアリサ。それとね、私はあなた達もよく知っている“霊”なの。だけどね……」
アリサは自分の顎をコツンと少年の小さな頭に乗せた。
「今からは私は、小林有里沙になるのよ。この子の……、お隣さんで幼なじみの可愛い女の子になるの」

――そうしてアリサは、幼なじみになった。

第零部　因果（後書き）

たぶん、多くの方が「意味不」と思うと思いますが、これはあえてこうしましたw
本編の過去の話です。
というか、全ての始まり??
感想いただけたら、もうそれはもう、非常に嬉しいです!!

第一部　定義（1）

第一部　定義

燦々とした日の光で照らされている深い森がずっしりと横たわっていた。どこまでも続く森林の手前には、緩やかな勾配の草原が続いている。絶え間無く吹く軽やかなる風に合わせて草花がたなびく。

揺れる草花に紛れて、一人の少年が仰向けになっていた。

綺麗だが所々はねた髪を有し、か弱い子供の狼のよう、そんな表現がしっくりくる。

頭の後ろに手を組み合わせて枕とし、両足はぞんざいに放り出され、そして微かに寝息を立てている。少年の髪も草花と一緒に風に揺られ、その髪先が広がる。

少年の顔の横にスケッチブックが二本の鉛筆と共に置かれていた――もとい、放られていた。上側を向いている表紙は真新しい黄色で、そこまで使い込まれていないようだ。

風でページがめくられていくスケッチブックはよく見てみるとめくられる全てのページが真っ白で、何も描かれてはいなかった。

スケッチブックに一人のスカートをはいた少女の影が落ちた。風で揺れている長髪を有している。少女は腕を伸ばし、先程風でめくられていくスケッチブックに飛ばされた鉛筆を二本、拾い上げた。そしてそのまま腕を横にスライドし、スケッチブックも拾い上げる。小さな溜息をしながら胸元の高さまでそれを持ち上げると、器用に右手の人差し指と中指で鉛筆をはさんで持ち、残りの指でスケッチブックを支えた。

しばらくその長髪の少女はスケッチブックを眺めていたかと思う

と、ゆっくりとページを一枚、めくった。
心なしか、少女は若干緊張しているよう。指先にうっすらと汗が滲む。
めくった先の、最初のページはもちろん真っ白。
やや緊迫感が漂う空気を纏っていたが、それは霧散して消えた。
が少女は、何を諦め切れないのかページをめくる左手は留まることを知らない。高速でページをめくっていく少女の瞳には期待の星が。
しかしめくるページは全て白い。全くと言って使われていないようだ。
少女の綺麗な指先が、その繰り返す運動をだんだんとにぶらせ、しまいには止まってしまった。掴んでいためくりかけのページから指を離す。
少女はジト目でスケッチブックを見つめた。
少女はその本当に真っ白で、何も描こうとされないページに手を優しく置く。
――こいつは何も描いていなかったのか……。
置いていた手を離すと、少女は今度は少年を見つめた。
よく見ると割と整った顔立ちをし、目や鼻といったパーツの形や位置も端正な面持ちのそれだ。今は口をほんの少し開け、そこから寝息が発せられている。
唇に目線が無意識的に集中。少女の口も少々開放。ややジト目だった少女だが、そうしているうちに柔和と表現すべきような瞳へ。
しばらくこの状態が続いた。そよ風で揺れる草花や森林の葉の音はシャットダウンされ、少年の寝姿に完全に魅入っている。
ほどなくして突然強風が吹いた。少女の長髪が広がる。
一瞬だけの強風だったがそれは少女を現実世界に引き戻すには十分だったらしい。
少女がハッとし、思わず手に持ったままだったスケッチブックを落とす。地面に落下し散らばるスケッチブックとえんぴつ。
少女は先程までの自分の行為に頬を上気させながらもスケッチブ

ックを拾おうと手を伸ばす。
と、スケッチブックが風に吹かれてページがめくれていった。
ページはどんどんめくられていき、最後のページまで来てしまった。
最後のページには、少女の姿が描かれていた。
少女はそのまま拾い上げる。
――なんで私の絵を描いているのだ、こいつは。
疑問符を浮かべている少女の肩にいきなり女性の手が置かれた。
後ろを振り向くと赤髪短髪でニヤッと笑っている女性が見えた。
年は二十代前半といったところか。
「歌織（かおり）」少女が呟いた。
「見てたよー、アリサ。あんたも可愛いとこあんじゃない！　いやー、なかなかの青春っぷりだった！」
うんうんと首を振る歌織と呼ばれた女性。
「眠る愛しい彼もまたかっくぃぃ。私、うっとりしちゃいました。ってな感じ？」歌織が有里沙（ありさ）をからかう。
「なんで私がこいつにうっとりするんだ。こいつはただの幼なじみだ」
「幼なじみってのはねぇ、そういう恋愛的な要素が一つや二つはさぁ、もうひゃくぱーくっついてくるもんなんだって。あなたもさっきまでリンゴみたいに顔真っ赤っ赤だったわよ？」
「真っ赤だと何かあるのか？」
首をかしげながら聞くありさ。
その動作を見たかぎり、どうやら本気でわかっていない。
「そういえば、あなたってこういう知識が全くと言っていいほどないんだったわね……」歌織が嘆息まじりに言った。
「そうね……」
指を顎に当て何やら考え事を始めた。
――キスって教えたっけ？
次はキスを教えようと決め込み、有里沙に視線を戻すと、有里沙

の手元にスケッチブックを見つけた。そこに描かれた有里沙の姿も。
「あれ？　アリサは自画像描いたの？」
「私のじゃないぞ」
「じゃあいったい誰が……」
今日は自然をスケッチするはずなんだけどなーと思いつつ、一つの可能性にたどり着く。
「ははーん。なるほどー」視線は寝ている少年へ。
「カズかぁー。うぶなことやってんじゃない」笑いながら言う。
「なんでカズは私のことを描いたんだ？」
有里沙はくりっとしたややツリ目気味の瞳をカズと呼ばれた少年に向ける。
「それはね、あなたに恋してるからよ」
「恋……？」再び歌織に視線を戻す有里沙。
「そうよー。恋ってのはねー……」
その時カズが寝返りをうった。有里沙の足にくっつくほどに。
有里沙の顔が紅潮し、萎縮してビクッとする。
しかしカズはまだ起きないのか、はたまた良い枕を発見したと思ったのか、有里沙の脚に腕を巻いて俯せの姿勢をとった。
そこまでされるとたまったものではない。
「カ、カズ。お前は……なぜ、いきなりくっついてくる！！！」
有里沙はそう叫ぶと、くっつかれていない右足を大きく振り上げ……、カズの顔面をおもいっきり蹴り飛ばした。
「ふぐぉ」
クリーンヒット。
鈍い音と共にカズが苦悶の声を漏らす。そして足がのめり込んだ顔面が後ろに首ごと勢いよく曲がり、一瞬遅れて体がまるごと吹き飛んだ。
三回ほど草花を巻き込んだバウンドをしながら吹き飛ぶと、ゴロゴロと転がって行き、やがて俯せの状態でパタリと動かなくなった。バウンドする際には吐血したようなエフェクトが見えた気がした。

有里沙はまだ顔を赤らめながらも脚を下ろし、頬をぷくっと膨らませている。腕を組んでそっぽの方へ顔を向けた。
「おーおー、飛んだねー」
わざとらしく右手を両目の上にかざし、左手は腰に当てた歌織が言った。そして今度は腕を組み、カズへと向かって歩いて行った。歌織の向こうではカズが腕を使って上半身を起こそうとしている最中だ。
しかしカズはなんとか体を起こし地面に座ると、腕組みした女性の影が落ち、さらには妙な威圧感がすることに気づく。
嫌な予感のせいで青ざめた顔を上に向けると、にっこり笑顔の歌織が。
「カーズーヒーロー？」表情一つ変えずに言う。
「か、歌織先生……」
あははっと苦笑いを浮かべながら、ずりずりと後退を始める一央（かずひろ）。
「今、お昼寝の時間じゃないよねー？」
「は、はい」
一央は今だに後退中。ずりずり。
「じゃ……私が怒る理由もわかるわよねー？」
歌織の、腕組みをはずし組み合わせた手からポキポキと相手を威嚇する音が聞こえる。
「あはは、は……。って、ダッシュ！」
もう笑ってなどいられない。そう悟った一央はバッとからだを翻すと、脱兎の如く駆け出した。
「待てやコラー！！」
女性とは思えない啖何を切ると、こちらも猛ダッシュ。
「殺るぞコラー！！」
「どういう意味で言ってんだよそれ！！」
二人は有里沙を残して遠くまで行く。有里沙は尻目にそれを捉えると、膨らませた頬を直し腕を下ろし、いつの間にか落としていたスケッチブックを拾いあげる。有里沙の姿が描かれたスケッチブッ

ク。歌織は恋しているからだと言った。
「恋……」
胸が急に苦しくなり、思わず抑える。
これが何の感情なのか。有里沙はわかっていなかった。それでもこれは大切な想いだということだけは、わかっていた。
顔を上げカズと歌織が走り去った方向を見つめた。カズと歌織が仲良くしていたことを思い出すと、妙にいらついてきた。
有里沙はまた頬を膨らませると、スケッチブックの自身の姿が描かれているページを開き、そのページだけ綺麗に破りとった。破りとったページは折りたたみポケットにしまう。
そしてまた、カズが走り去った方向を見つめた。
風が吹き、有里沙の漆黒の長髪が踊った。

第一部　定義（2）

＃

夕暮れがせまっていた。所々にぽつんと建っている木造建築の民家が、影を纏い不気味な雰囲気をかもし出している。昔からここに住んでいる一央と有里沙には馴れたものだが。

一央と有里沙は住んでいるアパートの部屋がお隣りさん同士なので、今は一緒に帰宅している最中だ。一央は有里沙と並んで歩き――一央の方が少し身長が高い――なにやらちらちらと有里沙の顔を盗み見ている。有里沙はといえば、そんなのお構いなしに歩いて行く。

「ねぇアリサ」

「なんだ？」歩調を全く変えずに、また、一央の顔を見ずに有里沙は応える。

「えっと……、何て言うか……」

少しの沈黙の空白ができる。

一央は有里沙がなにやら不機嫌な様子なので、その原因を知りたかっただけなのだが、やはり聞きづらい。そもそもこういうことは聞いても良いものなのだろうか。デリカシーがないやつだとか思われないだろうか。それに有里沙は……

「うじうじとするな」有里沙がこちらの思考を断ち切るようにして言った。「私に何か用なのだろう？」

「えと……。あ、そだ。今日、うちに泊まっていかない？」

「は……？」

思わず歩調を緩め、一央の顔を見る有里沙。

「ほ、ほら、最近なにかと物騒だし？　暗くなるのも早くなってきたし？　寒くもなってきたし？　もしかしたらもうすぐ雪降るかもだし？」
空中を見ながら、なにやら理由になってもいないことを熱弁する。
「まあ泊まってもいいが、もちろん私はベッドだぞ。ふわふわのやつな」
えっへんと胸を張る有里沙。
「えっ」一央が硬直する。「なんで！？」
視線を有里沙に向けると夕日を背にしたえっへんポーズの有里沙がいた。すると得意げに話だした。
「当然だろう。お前は私の幼なじみなのだからな！　幼なじみとして扱ってくれるだけ有り難いと思うがいい！」
最後の方はポーズをやめて、その自身にできた夕日の影の中から一央を指差した。
そしてくるっと体の向きを前に戻すと、またすたすたと歩いて行ってしまった。一央は慌ててその後ろを追いかける。
――やっぱり、怒ってるよね……。
一央の家に来てくれるとは言ったが、何か不機嫌なのは間違いないようだ。
――でもなんでかなー。
有里沙の後ろを首を捻りながら歩いていると、荒れた道の脇にこの村唯一コンビニを発見した。所々錆びていて、歴史が感じられる――一央たちが産まれる前からあったらしい。広告用の店前の旗は長いこと風雨にさらされ続けぼろぼろだが、入口に一枚の新しい広告のポスターが貼られている。そこには――。
それを見た一央。何かいい考えが浮かんだのか、立ち止まり、有里沙に向き直ってその華奢な肩に手をかけた。
「ちょっと待ってアリサ」
「なんだ？　カズ」振り返り応える少女。
「甘いのとお肉、どっちがいい！？」

有里沙の両方の肩に手をかけ、新しい発見をした子供のような目で一央は有里沙を見た。
「えっ。甘いものか肉？」
唐突の質問になんとも言えない表情の有里沙。正直質問の意図がわからなかった。それでも有里沙はこう断言する。
「断然、甘いのだなっ」
またも目を閉じてのえっへんポーズで胸を張る有里沙。
「それよりなんだ、いきなりこんなことを聞いてくるなんて。はっ、まさか甘いのが食べれるのか！？　そうなのか！？」
胸に腕を持ってきて、こちらも少年のような輝きを持った瞳をする有里沙。瞳の中にはキラキラと輝く星が見える――気がする。
一央は有里沙の肩をぽんと一度叩くと、ちょっと待ってて、と言ってコンビニの方に走って行った。走り際には変にきらびやかな笑顔で、シュピッというこちらも変な敬礼をしていった。キラキラ輝く星のエフェクトをぜひともつけたい、そんな感じだった。……簡潔に述べると、気持ち悪い。
しかし一人残された有里沙は、急に走って行った一央を見て、昼間の光景がフラッシュバックしていた。歌織と走って行った一央。胸が痛かった有里沙。
それを考えると、またさらに苛立ちが有里沙につのってくる。頬を赤くし、唇を尖らせる。
――あいつは、私の幼なじみなのに……。

#

「やっぱりなんか怒ってるよな、アリサ」

コンビニの入口のドアに身を隠し、俯きなにやら考え事をしている有里沙を眺めながら言う一央。透明なドアなので姿はまる見えなのだが。
コンビニの中には店員さんが一人いただけで、カズが入ったときにはカズ以外に客はいなかった。
大分老朽化したコンビニだ。クーラーは点けずに、使われているのは電灯と冷蔵、そして電子レンジくらいだろうか。品揃えは悪い。たまに菓子パンやペットボトル飲料水を見かけるだけで、ほとんどが畑でとれた野菜か店員さんが作った食品だ。しかしお客さんはちらほらと来るようで、こうして細々と存続している。
「おう、カズ。あんまん二つ、あっためたぞ。取りに来な」
カズの背後にあるレジの方から聞こえた。
カズは体の向きを後ろに向けると、レジに駆け寄った。
「ありがとー、おじさん」
「おおっ」
おじさんと呼ばれた男は、白髪をオールバックにし顔や手はしわだらけの、どう見てもお爺さんである。しかし外見とは裏腹に、生き生きとした雰囲気がある。まだまだ若いもんには負けんわい、といったところか。
お爺さんはしわだらけの手に持った二つのあんまんをカズに手渡した。
「熱いからな。気をつけろよ」
「うん」
素直に頷きカズはあんまんを二つ受け取った。そして会計を済ませると、今度は店内から有里沙を眺めた。目を細め、口をとがらせている有里沙はしゃがみこんで土の地面に何かを書きこんでいる。吹いてくる風で揺れる髪を抑えている。
外にいる有里沙を眺める一央を見たお爺さんは、長年の感（？）から一央の心境と二人の現状をよみ取った。ははーんと笑い、目つきもそれにならう。……なんかデジャヴ。昼間の歌織が連想される

かもしれない。
「どうしたんだ、カズ」一央の横顔に言う。「えらく落ち込みやがって。獲物を捕らえそこなったライオンさんでもそんな顔はしないぜ。まあ人間は表情豊かだからなぁ！」
がははと豪快に笑うお爺さんは、もうどこかの豪胆な海賊に見えてしまう。ジム＝ホーキンズと愉快な仲間たちと宝島でも目指すのかな。
一央はお爺さんに向き直り、レジに肘をつく。
「そんな顔してるのかよ、オレ」
「おうともよ。ていうか、まさかアリサを捕らえらんなかったのか？　この色男さんや？」
「えっ！？　いや、そんなまさか。オレがアリサを捕らえるなんて。それにオレは色男じゃないっ」
顔が赤く見えるのは透明なドアから差し込む夕日のせいか、はたまた別の理由か。
一瞬考え込む顔になったお爺さんだが、話しこむと有里沙を待たせてしまう。そこは心得ている。
「まあ、無理には聞かないが、頑張んな」
バシッと一央の肩を叩くお爺さん。イテテと小さな声を一央が漏らす。
「うん。ありがとおじさん」
じゃっ、と手を挙げてドアに向かって一央は歩いて行く。一央にはその手にあるあんまんをどう有里沙に渡せばいいかわからなかった。一央はドアに手をかけた。
「カズ、ちょっと待ちな」
突然後ろから声をかけられる。
「ほら。ちゃんとキャッチしろよ」
後ろを振り向くと、お爺さんがこちらにむかって何か白いものを一つ投げてきた。キャッチする一央。柔らかい。よく手元を見ると、それはあんまんだった。

「これって……」顔を上げお爺さんを見る一央。
「オレが食おうと思ってたやつだ。そいつはくれてやる」
お爺さんはグッドポーズをとる。
「うまくやれよっ」お爺さんは言った。
一央はまたも素直に首肯した。
「ありがとっ、おじさん！」
ドアから駆け出しながら一央はお爺さんに言った。お爺さんは腰に手をあてて微笑んでいる。
一央がいなくなったコンビニの中は、静寂に静まり返った。お爺さんは一息ため息をする。
「まだまだ若いもんには負けんわい」腕をまくりながらお爺さんは言った。
きっと――淋しさを紛らわすために言ったのだろう。

第一部　定義（3）

＃

しゃがみこんで、なにやら地面を、近くにあった木の棒でいじっていた有里沙は、体がこわばっていることに気づいた。しゃがみ続け、脚に血液がたまった影響だろうか。それでもかまわずに有里沙はしゃがみ続けた。

風が吹き、有里沙の体にぶつかる。たなびく髪を抑え、またも口をとがらせた。

――ばか。

少しの時間、待たれているだけなのだが、タイミング悪く、やや不機嫌な有里沙には長めに感じ、淋しさも感じたのかもしれない。

体が唐突に寒気立ち、ぶるっと震える。

――……寒っ……？

たしかにもう秋も中盤だが、体が震えるほどの寒さでもないだろう。有里沙は両手を見つめると、いつのまにか血の気が引いていた。両手をこすり合わせ、息をふきかける。そして再度こすり合わせ、両手を見直す。表面上は血の気が戻っているように見える。

――寒っ。

風が吹くと、寒気がする。

突然、寒さでこわばった有里沙の両頬に、温かい何かが押し当てられた。

「ひゃっ！！」

思わず飛び上がってしまい、いましがた押し当てられた両頬を抑えた。
「ななな、なんだ！！」
素早く体の向きを逆転させ、背後の人物を見やった。
「カズ……！」
両手に計三個の大福――にしては大きくて温かい――を持ったカズがいた。してやったり、と笑っている。
有里沙はむぅっと頬を膨らませる。そしてなぜかファインティングポーズ。
「ごめんごめん。はい、あんまん」
そう言って手に持っているあんまんを一つ、差し出した。
右へ左へとステップを踏んでいた有里沙だが、それを見ると、体の動きが硬直した。口をだらしなく半開きする。
一央の顔を見つめ、一央の手元のあんまんを指差す。一央は笑いながら頷く――苦笑いかどうかは謎――。
「おおっ……」
じりじりとあんまんに近づいていき、一つを掴み取る。そしてまずは一口。
「やっぱり甘いのはウマイなっ」
一央は、ははっと笑い、じゃあ行こうか、と帰り道に復帰する。
それを追いかけて、有里沙は一央の隣を歩く。
「おかわりはあるからねー」一央が朗らかに言った。
有里沙の無言の首肯。口にあんまんが詰まっているからだ。
――よかった。少しは機嫌、直ったかな。
物で釣ったような気がするが気にしない。気にしたら負け。笑顔でごまかす。
有里沙は一つ目をたいらげ、一央の手元の二つ目に手を伸ばし、食べにかかる。
――う、うまいっ。
物で釣られたような気が、心の端っこでしたような気がするが、

気にしない。
――私は寛大だからなっ！
どこにつっこんでいるか謎であるが、ほくほくと幸せそうな顔をする有里沙。
――手には甘いもの、隣にはカズ。
ふふふ、っと何かに勝った気分になる有里沙。
その有里沙の横顔を眺める一央。笑顔の有里沙を眺めているせいか、顔がほころんでいる。すると、有里沙におでこを指で押された。
「そんなに私を眺めてどうしたのだ？」有里沙が言った。
「んー？　いや、なんでもないよー」
あはは、と一央はごまかした。
有里沙は、キョトンとした顔で一央を見る。やはり、くりくりとしたツリ目が印象的だ。
有里沙は、再度手元のあんまんに視線を戻すと、今度は少しずつはんだ。
しばらく、静かな時間が流れ、有里沙は二個目のあんまんを食べ終わり、一央はただ有里沙を眺めていた。
「……」
押し黙る二人。吹き抜ける風の音がやけに響く。
ほどなくすると、いつのまにか、一央も有里沙ではなく、森の方を見ていた。どこまでも続く深い森には、何もない。もちろん木々は豊かに生え、草花も咲きほこり、中に入れば動物にだって会えるだろう。しかし、ただそれだけ。ここに住んでいる一央にとっては、普段から見慣れた、ただの変哲のない普通の森であるためか、何もないように視界に映っていた。夕日が手助けしてできた、森の大きな影は、一央と有里沙まで届いてはいなかったがすぐ近くまで来ている。
何もないはずの森なのだが、妙な違和感が一央にはしていた。いつも違い、異質な。しかし、普段感じている何かと似たような異常。
一央はしばらくして足を止めた。森の方から何かの気配がする。

そしてそれに伴った微弱ながらの寒気と。
ふと気づくと、すぐ目の前に一央の顔を覗き込む有里沙の瞳があった。急に立ち止まったので、どうしたのかと思ったらしい。
「どうしたのだ？　カズ」
心なしか、口を小さくして言う有里沙の吐息が、白くなっているように見えた。
一央は嫌な思いを振り払うように首を振った。
「なんでもないよ」
有里沙はまだ何かが気になるようにいぶしかむ顔をしたが、納得してくれた。一央から離れて、先を歩いていく。
少しのあいだだけ、一央は森を眺めたが、すぐにやめた。いつもと変わらない、何もないただの森だ。
小走りをして、一央は有里沙の横に追いついた。
有里沙は今しがた追いついた一央の顔を見ると、話しかけてきた。
「カズ」ちょっとためらいがちに言う。「あんまん……うまかったぞ……」
一央は微笑んだ。
「よかったぁ……」
そう聞いた有里沙は、心の底から嬉しいといった表情になった。
それを見た一央は赤面する。あはは、と頬をかき、俯く。
そのとき、とてつもない寒気がして、体が硬直した。恐ろしい寒気だ。体を突き抜ける寒気がひしひしと――。
動かぬ体を無理に動かす。そして森を見る。きっと顔は青ざめていたに違いない。
――いた。
寒気の発生源。
森の影の中にいる。
地面まで届く長いローブを着た人物だ。ローブの陰になり顔が見えない。
そいつが一歩、踏み出した。脇を寒気が通り抜ける。

そいつは少しずつ寄ってくる。
一央は動けなかった。そいつがすぐそばまで迫ってきている。あともう少しで森の影を抜け、こちらに辿り着く。
後ろで息を呑む音が聞こえた。有里沙だ。その音を聞いた瞬間、体の硬直がとけた。後ろに下がり、有里沙を抱き留める。
ついにそいつが影を出た。
影を出た瞬間、そいつ全体から湯気が立ち上る。何かが焼けるというより溶けているような湯気。
風が吹き、そいつの頭にかかっていたローブのフード部分がはずれる。そいつの顔が見えた。
顔、顔、顔――。白い大小様々な顔が集まって一つの顔となっている。頬から飛び出した一つの小さな白い顔が断末魔の叫びを上げたかと思うと、溶けて蒸発した。鼻先にある顔も蒸発する。目から飛び出していたいくつもの小さな顔も溶けて消えた。
そいつが叫び声を上げた。顔全体を被う様々な顔からもだ。
そいつの右肩と思われるところが、ぐじゅっという音と共に消えた。右袖口から白いどろどろしたものが降ってくる。地面にぶつかり、霧散して消えた。
そいつはそれでも止まらない。
一歩一歩、たしかにこちらに近づいてくる。
左足が崩れた。相変わらずのどろどろした、所々足の形をしたものが広がり、蒸発する。
前のめりにそいつは倒れた。
左腕を一央と有里沙に伸ばしてくる。
一央は有里沙を抱いたまま後ずさりした。
人間のものとは思えない叫び声を、そいつがまたもあげる。
一央に左腕が届きそうになる。もう数秒と待たずに着くだろう。
青い顔をした一央だったが、胸元でぴくりとも動かなかった有里沙が身をよじらせる動きを感じとると、我に返ってより強く有里沙を抱いた。

左腕がせまってくる。そいつの小指と薬指が溶けて爛れた。
一央は腹をくくると、おもいっきり力任せにそいつの左腕を蹴り飛ばした。
左腕が飛び散る。白いどろどろしたものが辺りにばらまかれる。
とっさに一央は有里沙を庇い、背中にそれを被った。
――異様な冷たさを感じた。死んだ人間を触ったような。いや、もっと冷たい。
背中の上で小さな叫び声と、蒸発する音が聞こえた。それと同時に、余韻は残るが背中の冷たさも消えた。
顔だけを再びそいつに向ける。
そいつはもう上半身の半分だけしか残っていなかった。
――人間、じゃ……ない……。
一央は無意識に感じとった。
そいつはもう頭しか残っていない。鼻がもげ、地面にぶつかる直前に蒸発した。右目も溶けて消える。
「アぁぁあ〝あ〝アァ〝ぁァあア……ィいい〝……アァぁ〝ぁあ」
そいつが声を絞りだした。
そして、ぐじゃっという音を盛大に撒き散らし、崩れ、蒸発した。
後には、古ぼけたローブだけが残った。

第一部　定義（4）

静寂が訪れる。
あの白い“なにか”は消えた。まだ、それが与えた影響力が大きく、鳥肌が立っている。
一央は有里沙を抱いたままだったことに気づき、急いで離れた。有里沙はそのまま動かない。
一央は近くに落ちていた小ぶりの細長い小枝を拾う。警戒して腰がひけながらも、そいつが消えたあとに残ったぼろぼろのロープに近づく。
そのとき風が吹き、ロープがふわりと浮かび上がった。
ビクッと反応し、一央は慌てて下がる。
風はちょっとした弱いもので、ロープはすぐに落ち着いた。
一央はもう一度ゆっくりとロープに近づき、木の棒を近づけ、一瞬戸惑う。そしてつついた。
ロープをつついた瞬間、地面をこする感触がした。
一央は息を飲んだ。本当に何もなかったのだ。地面しかない。
――なんだったんだ……これ……。
今度はこすってみる。が、やはり何もない。
そうとわかると一央はロープの詮索をやめた。いつまでも続けていつも、意味はないとわかったのだ。木の棒を放り、ロープを見ながら後ずさる。そうしてロープから離れると振り返り、有里沙に向き直る。
「大丈夫、アリサ……？」
こくん、と胸に手を当てたまま前髪で顔が見えない有里沙は俯いた。まだ、恐怖が拭いきれないのか、ぴくりとも動かずにいる。
「……」
いつもの有里沙じゃなかった。ひどく怯えて震え上がっている。
昨日なんて、集団でGといわれる黒い飛行物体がネズミの亡きがら

をむしゃむしゃ食べているところを目撃しても「べ、別に私は怖くなんかないぞっ」と言っていたのに。青ざめていたが。
有里沙の様子がおかしい。たしかにあれは地上のものとは思えぬ恐ろしさだった。
一央はゆっくりと有里沙に歩み寄り、目の前で手を振る。放心状態のように見えたのだ。
有里沙は自分の顔のすぐ近くで手を振られているにも関わらず、動かなかった。風が横から吹き抜けて、有里沙の髪がふわっと広がる。
一央は、今度は手を叩いて鋭い音を出した。辺りにこだまする。これほど近くで音を出したのだから、有里沙の耳にも届いているはずである。それなのに動かない。
「あれ……？」一央はそう言い、腰に手を軽くあてて頬をかいた。
あれを見たとしても、普通の人間でもここまでは怯えないだろう。普段の有里沙を見ているのなら、なおさら違和感を抱く。
一央は指を有里沙に向けてのばした。目的地は有里沙の頬。
有里沙の頬に触れる、直前に有里沙は動いた。顔を上げてまっすぐ前を見る。一央と目があう。その目は怯えていない。有里沙は「んっ？」と疑問形の表情になった。
「どうしたのだ？　カズ」
いきなり有里沙が反応し、一央は意表をつかれた。「えっ……いや、なんでも……ないよ」一央は隠すように腕を引いて背中で手を組む。「有里沙は大丈夫？」無理に話題を有里沙にふった。
有里沙は一央の肩の向こうにある森を見た。鬱蒼たる深い深い森。そして連想される、さっきの白いどろどろしたもの。有里沙は質問に答えずに歩いて行ってしまった。
一央は慌ててその後を追った。
「アリサ……？」
ハッとした表情で有里沙が振り向いた。そして少し逡巡する顔つきになった。

「カズ……」何かを迷っているのか少しの空白が開いた。「今日は……ひとりで先に帰る」
有里沙はそう言うと、踵を返して行ってしまった。
一央には、どうしても、それを止めることも、追うこともできなかった。

#

――我々の存在は、ひどく希薄だ。
――疑問はないし、それが自然の摂理だと理解している。
――だがオレを、世界はもはや抑えきれなくなった。
――脆い、存在しているはずのない存在であるのに。
――彼女もいずれ、その一つとなる。
――しかし、彼女は今も世界と共に在る。
――ならば、オレが引きずり込もう。
――……あともう少しだ。

その瞳には、白いどろどろとしたものと対峙する、二人の人間が映っていた。

#

一央は一人、ゆっくりとしたペースで遠回りながらも帰路についていた。所々で目にする家屋が唯一、淋しさを紛らわす。
一央は悩んでいた。有里沙とあの白いどろどろとした“あれ”のことについて。
“あれ”は明らかに人ではない。どうしてあんなものがここにいたのかは謎だった。
――誰かに相談するべきかな……。
そして、有里沙。大丈夫だろうか。“あれ”を見た彼女は、ひどく怯えていた。普段の彼女からは想像できないほどに。
――やっぱ相談しよっかなー。アリサのこともあるし。
“あれ”のことを知っていて、なおかつ有里沙のことも相談できる。自然、ここまで条件があると、一央の中ではその人物が浮かび上がってくる。
――じゃ、このまま倫のとこに……。
そのとき、一央は正面の方から声をかけられた。
「失礼、そこの少年」
どうやら考え込みすぎて、気づかなかったようだ。目の前には黒衣に身を包んだ一人の男がいた。
男と目が合うと、男は満足そうに微笑みながら話を続けた。
「私、このような者ですが」
そう言って黒い革の手袋を履いた右手を見せてきた。名刺が一枚

乗せてある。
いぶしかみながらも素直に一央はそれを受けとった。
取った瞬間、手の先から異様な寒気が伝わってきた。反射的に手を引く。
血の気がサッとひいた。
男の手の平に白いどろどろした小さな顔が二、三個置いてあったのだ。
人間のものとは到底思えない、小さな叫び声が聞こえた。そしてすぐに、それは蒸発する。
思わず一歩後ずさった。顔をキッと上げ、男を睨みつける。
男は、ハハッと笑うと、短く刈り込んだ髪に手をやった。
「見覚えがあるようだな。ないと言うのなら、相当きちがいな人間だが」
そう言うと男は、後ろに向き直り、立ち去ろうとした。
「あんたは……」一央は呟いた。
「納藤さんによろしく」
男は手を挙げてそう言うと、そのまま去って行った。
しばらく一央は固まっていた。
そしてゆっくりと動き出し、どさくさで受け取った名刺を見た。
そこにはただ名前が一つ、書いてあるだけ。それは、
「村上翔人(むらかみしょうと)……」
村上が言った言葉を思い出した。そして決心する。
――納藤倫(のうとりん)に会いに行こう。
一央は走り出した。

第一部　定義（5）

一央は人っ子一人いない道を走り抜ける。
納藤倫の自宅兼雑貨屋「倫堂屋」まではもう少しとまで来た所だ。
垣根を飛び越え、畑の脇を走った。道であろうとなかろうと、ただ走り抜けた。反対側の垣根も飛び越える。
昨日までは一央も近所の人たちの農作を気ままに手伝う、ただの少年だった。森の中に流れる小川が見える。小川は良い休憩場所だった。
しかし今は、一央はすでに常識とは掛け離れた場所に片足を突っ込んでしまった。ひどい吐き気がし、走る速さを上げる。
倫堂屋が視界に入ったところで一旦立ち止まり、息を整えた。ふぅっと一息ついた所で今度は歩いて行く。
二階建ての倫堂屋のちょうど上の辺りに夕焼けが見えた。大きくて紅い、その存在感が今は頼もしい。
そのとき、一央の足に細長い弾力のある物がぶつかった。すると、それは話しかけてきた。
「痛い……」男性にしては高い透き通った声だ。
一央の足元には一人の男が座っていた。裸足にぼろぼろで所々穴の開いているジーンズを履き、上もぼろぼろのシャツと足まで届く薄汚れた紺のローブを着ている。顔は被ったローブに隠れて見えない。
「君、手を貸してくれないかな……」男が右手を差し出してきた。
一央は警戒した。さっきまでにもう二人もおかしな人物と出会っているのだ。距離をとるために、わずかに後退する。
こちらの心を読んだかのように男は言った。「私は君に危害を加えるつもりはないよ」おおげさに両手を挙げる。「私のメリットがなにもない。変わっているな、君。……ああ。私の風貌か。気にすることではないよ」

今日はローブの人とよく出会う、と思い出しながら一央はその手をつかみ引き上げた。男の身長は一央とほぼ同じだ。
「ありがとう」ローブ越しに男が微笑んだのがわかった。
男はそう言うと、ローブの中をまさぐり始めた。好奇心に駆られた一央が中を覗いてみると、様々な異国のと想像される物がぶら下がっていた。細長い捻れた杖、虚ろのガラスの瞳を有する人形、土くれた指輪、ガラス玉、地図。男は立方体のガラスを取り出した。
「これを君にあげよう」一央の手をとり、押し込める。男の手は意外と小さかった。
一央は疑問に思いながら立方体のガラスを掲げた。「キレイですね……」ガラスは夕日を余すことなく通し屈折させる。
男が手を口に当て、クスリと笑った。「そうですか」ローブを垂らして腕を隠す。「それは遠い異国、ヨーロッパで得たキューブです。あそこは広大で優雅ですよ。一度行くことをオススメする。私はごらんの通り、ただのしがない旅人でね。あちらこちらと見て廻っては、気に入った物は全て手中に収めてきたんだよ。私は本当、酔狂かもしれない」
一央は胸元までガラスのキューブを下ろし、ローブで半分隠れた男の顔を見た。すす汚れている。
男が笑みを浮かべた。優しくふふっ、と笑う。そのときだった。
「君は納藤君の関係者かな?」男はそう言うが早いが、早口で聞き取れない言葉をまくし立てた。
一央の手元のキューブが青い光を帯びたかと思うと、爆発した。光の爆発だ。一央は到底反応できるわけがなく、まともに光を浴びる。「うっ」
視界が青に染まる。男の顔が光に照らし出された。光の中で見た男の顔は、美少年と呼ぶにふさわしい、小柄な顔だった。鋭い笑みを浮かべている。男の瞳は、真っすぐに一央を向けられた。一央はどうしてか動けない。
ほどなくして、光の洪水が収まった。後に残るはいつもの風景。

夕焼けも、森も、男も、何も変わっていない。一央は息がきれていた。汗が額から落ちる。
男が笑った。「おっ。あれに堪えうるか。思わぬことだね」心底嬉しそうに言う。
一央は後ずさった。今日はおかしなやつとばかり会う。
――今日は厄日か！
罵ったところで現状は変わらない。男が左手の黒い革手袋に、何も履いていない右手をかけながら近づいてくる。よく見てみると、左手にしか革手袋を履いていない。
「大丈夫。痛くはないよ」
ふと、一央はまだガラスのキューブをつかんでいたことに気づいた。力強く握ると血が滲んで鋭い痛みが走る。
「少し試すだけだ……」男が近づいてくる。
一央は男に向かって力任せにキューブを投げつけた。真っすぐに飛んだガラスのキューブは男の頭のちょうど側面に当たる。キューブの角がローブをひっかけた。男は別段気にするそぶりを見せないが、頭にかかっていたローブがとれた。現れた顔はおそろしくハンサムだが、青白さがある。まだ若い。
「痛いなあ……」少年が言った。「私は傷つけるつもりはないというのに。少し試すだけだから。動かないでほしい」
少年のこめかみのあたりから血が一雫垂れた。血は頬をなぞり、顎から滴り落ちる。
一央は少年を見据えたまま、金縛りにあったかのように動けなかった。脚が小さく震えている。
男は左手の革手袋をはずした。華奢な手先だ。そのまま一央の額に向かって伸ばしてくる。空気が冷たい。額に触れた。
男の手を通してすさまじい衝撃が伝わり、脳が吹き飛ぶ感覚がした。
「うっ、あああああ！」男が右手で一央の口を塞ぐ。
一央は絶叫をあげた。とてつもない悪寒、吐き気、頭痛、さらに

は体中を苦しい痛みが走り回る。生きた心地はおろか、死に寄り添われている。
空がぐるっと回転した。夕焼けと雲が混濁した色になる。その中に小さな星の集団がまたたいている。大きくてきれいだ。いつのまにか空一面漆黒に染まっている。周囲全てが黒くなった。森も地面もあの男も。地面が黒く染まり、抜け落ちた。気持ち悪い浮遊感がする。どこかしらから、か細いいくつもの声が聞こえる気がする。周りには何もなく、ただただ延々と漆黒の闇が広がるばかり――。
途端に腰に衝撃がきた。
「うっ」
地面に尻餅をついていた。顔を上げると、森と夕焼けが見える。手と尻には土の地面の感触がする。いつのまに消えたのか、余韻はあるが、あの悪寒も消えている。
「へー。これは思った以上の収穫だね」少年の声が聞こえた。「まさか本当に耐えるなんて、正直いつものようにダメだと思っていたよ。何か特別な要因でもあるのか、私としては興味深い。ただ、君が納藤君の知り合いというのは確実なようだ。この村で霊媒師に精通しているのは彼しかいない」左手に革手袋を履き直しながら少年が言った。
一央は精一杯の敵意を持った眼差しで少年を睨みつけた。少年がこちらの視線に気づいて、大して悪びれたそぶりも見せずに言う。
「ゴメンゴメン。元の予定ではこんな強引なことをするつもりはなかったよ。私としては、このやり方はなかなかにスマートじゃないし、手っ取り早いというのはいいんだが、改善したい。ただ、今回は君に何か急ぎの用があるようだしね。パパッと終わらせたんだ」
そう言いながら少年は倫堂屋に視線の先を移した。夕焼けがもうすでに半分、二階建ての倫堂屋の屋根に沈んでいる。少年がこちらに向き直った。
「君は大変興味深い。君ならば……」
突然、少年が一方的な会話を中断し、真上を険しい目つきで見つ

めた。一央もつられて見ようとしたが、それは叶わなかった。その前に事が起こったからだ。
少年が立っていた位置に何か巨大なものが降ってきた。土煙が盛大に上がり、一央や周りを包み込む。一央は風圧に耐えるために顔に手をかざした。小石が飛び、一央に当たる。
一央が腕を下ろすと、立ち込める土煙になにやらゆらりと人影が映っていた。かすかに呻き声が聞こえる。
風に流され、土煙が晴れた。現れたのは一人の青年男子。タンクトップにイージーカーゴパンツというラフな格好だが、なぜか両脚が凍っている。
男が自分の凍った脚を見て、顔をしかめた。「うっ。他にも霊媒師がいたのか」

第一部　定義（6）

一央は先程までいたあの美少年がすっかり消えてしまっていることに気づいた。上から降ってきた青年に潰されたわけもなく、そう考えるならば、あの一瞬で避けたのだろう。一央が気づく前にとっくに気づいていたことといい、先程のおかしな現象といい、どう考えても普通ではない。そして、空から降ってきたこの青年も。

青年が俯き、凍った両脚を見ていたが、ふと顔を上げて誰もいない周囲を見渡した。一央のことはチラッと見ただけで、素通りしていき、最後に倫堂屋を見る。そして凍った脚を使いづらそうに動かし、倫堂屋と逆を向いた。

青年が渋った顔をしながら脚に触った。「くそ」そう言いながら青年は、凍りついた太ももをコツンと叩く。

一央はゆっくりと立ち上がった。どうやら青年は一央のことを気にもとめていないようだ。凍りついた脚をどうにかしようとするのに気をとられている。一央は静かに後ろにさがった。美少年やこの青年のことなど気になることは多いが、ここは引き下がることにした。危険が多すぎた。

青年は脚を見ながら何やら考えにふけっていたが、ようやく決心したらしい。

そう思った直後、青年が唸りだした。

低い、腹の底に響く音。一央はたじろいだ。次は何が起きるのか、一央にはまったくわからないが、今は逃げることだけを考える。倫堂屋に逃げこもう、と一央は決めた。そのとき、背後から鋭い声が飛んできた。

「カズ！　伏せろ！」若い男の声だ。

一央がパッと後ろを向くと、一人の青年が目に入った。倫堂屋主人、納藤倫だ。倫堂屋の足元にいるが、普通じゃない。一央は目をこすった。

倫は半径一メートルはあるかと思われる、燃え盛る球体の炎を頭上に掲げていた。球体から炎が幾筋か立ち上り、うねっては孤を描いて球体に還っていく。球体からは凄まじい量の熱気と光が放たれている。

後ろの青年から驚きの雰囲気が伝わってきた。「やべえな……」落ち着いてはいるが、言葉にはうっすら焦りが混じっていた。

一央も直感で感じとった。急いで伏せる。

頭上を熱気が通りすぎた。空気を焼きながら突き進む炎の球体の音がする。

唐突に爆発音が響く。次いで木葉の揺れる音と青年のくぐもった声が聞こえた気がしたが、爆発音に掻き消された。音は真後ろからだ。腕の隙間から後ろの状況を見る。元々青年が立っていた位置は円形の窪みができていた。青年は吹き飛ばされ、立ち込める煙りの中、近くの森の大木に打ち付けられている。

「いてえな……」背中をさすりながら青年が立ち上がった。「まだこんなに力を残していたのかよ、おまえ。だが、さっきよりは確実におちているようだぞ。ご覧のとおり、たかが氷を砕けてないぜ」芝居がかった動きで凍りついた脚を示す。

「くっ」今度は倫が唸った。

倫の方から炎の濁流が青年に向かって飛んだ。青年はひるむこともなく、濁流を全て受けきる。

「もうやめたらどうだ。諦めも肝心だぞ」青年が腰に手をあて忠告をする。

倫の攻撃がやんだ。無駄だと気づいたらしい。荒い息をしながら青年を睨みつける。

「オレの炎がまったくきかない……。どういう理屈だ、おまえ」

「言わせてもらうが、理屈もなにも、作り出したあんたでもわからないことをオレが知るわけないだろう？　そんな無駄な質問はしないに限る。ほら、さっきより顔色が悪くなってるぜ、おまえさん」青年が言った。

倫がイラッとしたのがわかった。「ものは試しと言うからな」
倫の周囲の地面を、炎が円を描きながら走った。走ったあとは赤くなり、そこから炎が立ち上がる。薄い炎だが先程の球体よりも熱い熱気がする。
青年は動かずにただそれを眺めていただけだが、それを無視してまたも唸り声を上げはじめた。さっきは気づかなかったが、この青年は脚に力をいれて、無理に氷を割ろうとしているようだ。突然、青年の足元から炎が噴き上がった。青年が炎に包まれる。
倫が早口で聞き慣れない言葉を呟いた。あの美少年が放った言葉と似た言葉だ。
青年を呑んでいた炎が晴れた。腰に手を当てた青年が姿を現す。
「何度言ったらわかるんだ、倫。あんたの炎はオレにはきかない」
青年の頭の後ろに音もなく小さな光が浮かび上がった。白い光を謙虚に放つ。青年は気づいていない。
「このあたりで手打ちとしないか？　おまえはオレを逃がし、オレも同様におまえには関わらない。どうだ、悪くない――いて、いてて っ！」
青年の後頭部に繰り返しあの光がぶつかっている。
「猛る炎はきかずに、小さな光に遅れをとるのか。なるほど、理解したぞ」倫の周囲にのぼっていた炎の壁が落ち、地面にぶつかって消えた。
青年は後ろの光にようやく気づき、嫌そうに顔をしかめた。「ずいぶんとチンケなことをするもんだ。おまえの周りの炎はフェイク、そしてオレを優しく包み込んださっきの炎もフェイク、これが本命だったってわけか」
青年が片手で光をつかみ、肉が焼ける音と共に握り潰した。手を払い、焼け爛れた肉をほろう。
「ずいぶんと狡猾じゃないか。シーザーにでも憧れているのか？なら、諦めることだぞ。あんたには一生無理な話だ。光の球でキャッチボールするのはお上手だが、せいぜい、肝試しの主要メンバー

になれる程度だろうよ」
「このっ……！」倫はそう言うと、また早口で呟いた。
青年の頭上にいくつかの光の球が現れ、一斉に落下した。青年はめんどくさそうに片腕で全ての光の球を弾き返した。腕が焦げる。
「なあ、あんたもそろそろ疲れてきたんじゃないか」黒く焦げ、えぐれた腕を見ながら青年は言った。「おまえ、そのままだと死ぬぞ。オレには知ったこっちゃないし、万々歳だがな」
青年の足元が光った。直後、地面を突き破り、光の球が飛び出し、そのまま青年の顎に直撃する。「いって！」顎から黒焦げた肉を飛ばしながら青年が叫んだ。
「おまえがいい加減おとなしくしてくれれば、オレも楽できるんだよ。焼き尽くすぞコラ！」倫が怒鳴った。
青年がたった今、半分になったばかりの顎をさすりながら倫を睨みつけた。「そのあたりまでにしておくのが賢明だぞ、倫。オレが怒りに体を震わせ、血を欲するが故に喉を膨らまし、おまえを八つ裂きにする前にだ」青年の後頭部から煙りが上がり、削れた腕と顎からも立ちのぼる。
「やれるものならやってみればいいさ。結果は見えてるがな。そのおしゃべりな口も開けなくしてやるよ」倫の背後にたなびく炎と光の球が出現した。
「ほう……」一央には青年の頬が引きつるのが見えた。青年の焦げた部位から上がる煙りがその濃さを増していく。
「倫。今の言葉忘れるなよ」青年が唸り声を上げた。三度目の唸り声は今までのどれをも凌駕していた。一央は思わず耳を塞いだ。全身が振動し、伏せている地面も微弱ながら揺れている。
「くそっ。やはりできるのかっ」倫が早口に、今度は長い言葉を呟きだした。両の手の平を胸の前で合わせ、目を閉じて一心不乱に言葉を紡いでいる。倫の頬を汗が通った。呼吸が荒い。もう既に限界だ。体から疲れが滲み、目に見えて消耗しきっている。おそらく次の一撃に倫は全てをかけているのだろう。失敗すれば、即ち死。こ

ういうことに疎い一央にも理解ができた。
ふと気がつくと、あの鼓膜を強烈に揺さ振った青年の唸り声が聞こえない。一央は俯せのまま肘を地面について顔を上げ、青年のいる方を見遣った。
青年は片手を腰に当て、仁王立ちで倫を見ていた。鋭い眼差しは真剣にただ真っすぐ前を向き、口をきつく結んでいる。ふと、一央は青年の半分になった顎が、まったくの元通りになっていることに気づいた。あの傷は見間違いなどでは決してない。目の前で傷ができた瞬間を目撃している。たしかにあったはずの傷が消えていた。そして青年の両足を凍らせていたはずの氷は、青年の足元に散らばっている。
「こいよ小僧」青年がバカにするように言った。
「っ……！　ふざけるなよ！」倫が歯軋りし、目を精一杯に使い青年を睨みつけた。「そんなに死を急ぐか！　死にたいのならさっさとオレに還ればよかったんだ！　ばかやろうが！」
倫が両手を振るった。倫を円形に囲うように、揺らめく炎と浮く光の球に混ざって、人間一人はまるごと余裕で入る大きさの幅がある光の円柱が数本立ち上がる。倫の顔が明るく照らし出される。「もう止まらない。後戻りはできない。果てろ。やはりお前はいらない」
「言っとくがオレは産みの親だろうが誰だろうが容赦はしねえ。等しくお前もただの醜い人間だ。吐き気がするね。オレの体はオレのもんであるし、お前に還るつもりも毛頭ない。倫、お前はただの間違った霊媒師だった」
倫が手の平を強く打ち合わせ、鋭い音を鳴らすと、青年の足元から光の濁流が青年を襲った。青年は前に飛び出してそれをかわす。
「なあ、ワンパターンだぞ？」青年が言った。
青年が前に手をついて前転する。青年の頭があった位置を光と炎が混ざった波が通り過ぎていく。次いで青年の眼前に光と炎の壁が現れる。青年は真上に跳び上がった。壁を越えようとする。倫が指を鳴らすと背後の青年の下方から光の筋が数本伸びてきた。それを確

認すると、青年は体をくねらせて最初の一撃をかわし、体を丸めて二本目をかわした。青年の髪の端が持っていかれる。
「おお、変わったことをするなっ」青年が表情を変えずに言った。
倫が前に両手を力任せに突き出した。青年のすぐ側にある光の壁が傾いた。青年はいち早く反応したが、空中にいたためかわせずにぶつかる。腕で壁を押さえているが、そのまま勢いに押され、壁に地面にたたきつけられる。肉の焼ける臭いがしてくる。
「だから言ったんだ……。もう、お前は終わりだ」倫が頭上に両手を掲げた。倫の周囲に立っていた光の柱が浮かび上がり、ゆっくりと回転する。切っ先が青年がいる地面に倒れている光の壁に向く。
壁の中心を突き破って黒焦げた腕が現れた。青年の上半身が腕を使って這い出てくる。「このオレが終わりだと？　お前が月に行けないのと同じように不可能なことだ。待ってろ。今すぐお前をすり潰してこね回し、ハンバーグにしてやる。少なくとも貧困に苦しむ子供を助けられるぜ。月にはその子供が行くことを神頼みすることだ」青年の全身が壁から出てきた。あちこちが焼け爛れ、見るに堪えない。
「……」倫は無言のままぼろぼろの青年を見つめ返した。
光の壁に立つ青年の足元からは煙が立ち、同様にして体全体からも噴き上がっている。「倫、おまえは今に後悔することになるぞ。断言できる」青年はそう言うと、足を曲げてしゃがみ、横たわる光の壁に手をついた。すぐにそこから煙が上がる。
瞬間的に青年が前に飛び出してきた。目に捉えられないほどの速さで瞬く間に倫との距離を詰めると、倫のすぐ手前まで来る。青年は硬く握った右の拳を大きく振りかぶり、倫に殴りかかっていく。倫は両手でそれを受け止めはしたが、圧力に耐え切れずに足が宙に浮き、吹き飛ぶ。
「くっ……！」
宙を飛びながら倫は右手を青年に向かって振るった。浮いている光の柱の一本が青年に向かって落ちるが、青年は両手で切っ先を押

さえ込む。右手の親指が蒸発した。青年が咆哮する。咆哮し、太く長い光の柱を他の光の柱に投げつける。盛大な火花を撒き散らしながら二本の光の柱は地面にのめり込む。
「あまいんだよ倫！　オレはこんなんで倒せないぞ！」青年が叫んだ。
　地面に転がり土まみれとなった倫はあぐらをかき、青年を見上げた。「おまえの性質くらいはいやでもよく知っている。さっき確信したばかりなんだがな。ほら。油断しまくりだぞ貴様」
　倫がそう言うと、地面にのめり込んでいるのと宙に浮く光の柱から何本もの炎が燃え上がった。急に出現した炎は青年に絡み付き、青年の体を素早くきつく縛り上げる。
「こんなものっ」青年はそう言うと、腕を使って振り払う。振り切られた炎は霧散して消えた。しかし、振り切ったはずの炎はすぐに元通りに治り、再び青年に絡み付いてくる。「くっ！」青年は表情をしかめた。
「こういう使い方もあるんだ。お前は自身の力を過信しすぎたな。勝負ありだ」倫は後ろに手をついて体をもたせ掛けると、深いため息をついた。気づくと、倫は顔面蒼白だ。
　青年がいやに耳に響きわたる雄叫びを上げた。一央と倫の体が震えた。
「まだ粘るのかよ。耐久性バツグンすぎるぞ」倫が言った。
「ふざけるなっ！　このオレがこの程度の薄っぺらい炎なんかで止められるとでも！？　オレを誰だと思ってやがる！　泣く子は黙り、わめき立てる婆さんはオレから逃げるならばと思わず川に飛び込み、屈強な勇ましい猛者共は震え上がって尻尾を巻いて逃げ出した！」
　倫が嘲るように笑った。「ついさっき誕生したばかりなのにそんなわけないだろう。口だけは達者だな。いったいどこで覚えたんだ？」青年縛り付ける炎がさらに強く青年を押さえつける。
「お前は魔族の者についての知識を持っているつもりだろうが、まったくもってダメダメだ。無知もいいとこだ」青年の纏う雰囲気が

変わった。「いいことを教えてやる小僧。オレ達魔族の者たちは悔しいことにお前たち霊媒師の血から出来ている。そして血とは代々後世に受け継がれるものだ。ならば先代は何をしていたと思う？同じくオレ達を作り上げた。お前と同じ血でだ小僧。オレにはお前の先代にこき使われていたという忌まわしい記憶がそりゃあもう深く根付いている。これからお前にもそうされるんじゃないかと考えると気分が沈む。テムズ川の泥に捕まって沈むみたいだ」

炎がついに青年を地面に叩きつけた。青年は顔色一つ変えずに倫を見る。その瞳は何も写していないかのように漆黒。

青年は深いため息をついた。「今度こそさようならだ倫」

青年が両腕を使い、無理矢理上半身を持ち上げた。炎の綱が引き締まる。相変わらず青年の表情は硬い。

「くっ」倫が思わず声を漏らした。倫が片手を上に曲げると炎の綱がさらに数本増えた。しかし青年は止まらない。しまいには炎を全て引きちぎって立ち上がった。

「あばよ」青年が風を切って倫に迫った。

「くっ」倫が両手を組み合わせた。青年の目の前に瞬時に炎の壁が何重にも現れる。さらに光の壁まで現れた。一連の倫の動きは人間業ではなかった。

しかし炎も光も関係なく青年は突き進んだ。速さを落とさずに壁を突き破って行く。突き破るたびに青年の体の一部が消し飛んだが、次の瞬間には元通りに傷口は塞がっていた。

青年が体を回転させ、右脚を振り上げた。倫は目を見はってそれを見ることしかできない。倫が歯をくいしばる。青年が足を振り下ろす。

第一部　定義（7）

そのとき突然、青年の右脚が吹き飛んだ。
「！？」青年の顔が驚愕で歪んだ。
空中でバランスを崩した青年の頭が次に吹き飛んだ。綺麗になくなる。勢い余った青年の体がそのまま倫にぶつかる。
「ぐうっ」倫が唸った。
青年の首から盛大に血液が吹き上がる。辺りを真っ赤に染めていく。倫は急いで青年の死体を横に転がすと、瞬時に体制を立て直し低い姿勢をとった。周囲を見渡す。周囲には俯せたままの一央と見るも無惨な青年の頭のない体、夕焼けでオレンジ色になった倫堂屋と森のみ――――。
「……っ！　誰だ！　隠れていないで姿を現せ！」倫が怒鳴った。
「隠れていたわけではない。納藤、おまえが気がつかなかっただけだ」
森の中から声が聞こえた。一央はどこかで聞いたことのある声だと思った。
「ほら、注意しないとすぐにそいつが再生する。頭を潰したところで良くて時間稼ぎだ。秘訣は、相手が復元するその前に行動力を奪う事だ」
森の中から電流が空中を走った。青年の両足にぶつかり、治りかけていたらしい右足を巻き込んで両足が吹き飛んだ。次の瞬間青年の吹き飛んだ頭の下から半分が復元した。
「ちっ。三人目かよ……。狂ってるにも限度があるってもんだ。ちとやりすぎじゃねえのか」青年の出来たばかりの口が動いた。「ったくついてねえ」青年の頭が口から上から何もない。なんとも気味の悪い。
「取り込め納藤。死にたくなければオレの言うことを聞け」
「素性の分からぬ男の言うことを聞けと！？」倫が言った。

「今はそれしかない。おまえも頭では分かっているはずだ」
倫は渋い顔をしたが、素直に言うことを聞くことにしたらしい。倫の足元の青年の下に楕円形の薄い炎が出現した。そのとき青年の頭が完全に回復した。
「おっと、ちょおっと待たないか倫？　まだ吸収するのは早いと思うぜ。得体の知れない輩もいるみたいだしな？　ここはどうだ。一旦原点に戻らないか？」青年が身振り手振り言った。
「原点……に戻る……？」倫がゆっくりと言った。
「そう原点だ。元を辿ればそもそもオレ達は殺しあう必要がない。理解？　オレ達は手を組むことができる。それはとても素晴らしいことだ。世界平和万歳？　ラブアンドピース精神だ」青年が右手を倫に差し出した。
倫は冷めた視線で青年を見た。「オレをハンバーグにするとか言っていなかったか」
「それは……」青年が視線を泳がせる。「……言葉のあやだ」最後はなんとか倫に視線を戻した。
「……」倫が青年を跨いで森の方に歩いて行った。
青年は動かせる顔だけを曲げて、背をこちらに向けて歩いて行く倫を見る。「……まずい」
青年の下にある楕円形の炎に青年が徐々に吸い込まれ始めた。炎の下はただの地面しかないはずだが、青年の体のもう半分が吸い込まれた。青年は必死にもがいた。しかし、ちょっとでも炎から出ようものなら電光石火で電流がそこを吹き飛ばす。最初に青年の右足と頭を吹き飛ばしたのもこの電流だろう。
青年が静かになった。どうやら逃げ出すのを諦めたらしい。「はあ、まったく……」青年がぽつりと呟いた。「おまえさんだけだ。オレに危害を加えなかったのは。おまえみたいな一般人に話し掛けるなんて、オレもおかしくなったもんだ」一央を見て言う。
「……。……あんたは死ぬのか……？」はいつくばった一央が青年に聞いた。

「死ぬと思うか？」青年が聞き返した。「お前たち人間とは体のできかたがちょっと違う。死にはしない。少し長い眠りにつくだけだ。しかしこれは愉快だな。このオレを怖がらないとは。おまえみたいな一般人は珍しい」
青年はこちらを深い、何も映さない漆黒の瞳で見る。「いいことを教えてやろう。倫は性悪のやつだ。あまり近づかないほうが、いざっていうときのためさ」
「違う。倫はいい人だよ。あんたとは気が合わないみたいだけど」
青年はこたえなかった。青年が少しずつ炎に呑まれ、残すは鼻から上だけになった。
一央は立ち上がった。倫のほうを見る。倫はこちらに背を向けたままだ。倫は何も言わない。
一央は青年を振り返った。青年はまだこちらを見ていた。
そして名の無き青年は消え去り、青年の姿が見えなくなった。
倫は青年が消えるその最後の瞬間まで一度も青年を振り返らなかった。

#

倫は硬い眼差しを深く暗い森の一点に向けた。視線の先は手前の大木の麓。気づきづらいが一人の男が立っている。全身を黒いコートに包んだ怪しげな男。
「顔色が良くなったようで結構だ。おまえに会いに来た、納藤」
コートからはみ出す両手の右手だけに黒い手袋を履いている。間違いない。村上翔人――――。
「何者だ貴様」倫が警戒したような雰囲気で言った。

村上が一央をその鋭い目で見た。「あそこの少年から聞いていないのか。名刺も渡したんだが。……まあいい。私の名前は村上翔人。どうぞよろしく」淡々と村上は述べた。
「オレに会いに来たというがなんのようだ。蔵書にでも目を通したいのか？」
「いや。私には必要のないものだ。もっと必要としている人がいる。そいつに見せてやりたくてな」村上が森の中から出てきた。夕焼けがその顔に深い影を落とす。「ぜひとも承認を得たいところなんだが」
倫は無言のまま動かない。気のせいか、倫から発せられていたあのけだるい感じが感じられなくなっている。「すまないが無理な相談だ。うちの蔵書にあやかりたく、よく来る者がいるが、時と場合による。最近、一人の女性を断ったばかりだ」
「納藤。忠告しておこう。おまえは最近になってようやく使い魔を作り上げたようだが、私は七歳の頃には既に一体召喚していた。世間はよくおまえを最強の新人だと褒めたたえるが、所詮井の中の蛙。世の中は広い。敵わない敵もいることを今ここで教えてもいいぞ」村上がフードを脱いだ。現れた短髪の男は静かに、明らかな敵意をその瞳に燃やしている。
「生憎と今はやる気分じゃない。今ならまだ見逃してやるぞ」一央は村上が言うと思っていた台詞を倫が言った。
村上は腰の辺りから名刺入れを取り出した。「納藤。最後の忠告だ。おまえは私に動かれると厄介なことくらいは理解できるだろう？　蔵書まで案内をするんだ」村上は何食わぬ顔で名刺をいじり、一枚を取り出して倫に向かって指ではじいた。名刺が倫の足元に刺さる。
一央は後ろを振り返った。楕円形の炎は消えてはいるが、その跡は残っていた。そして二人の人間を越えた戦いをした傷跡を眺めた。あんなのがもう一度繰り返されると思うと、一央は寒気立つ。
前を見ると、ちょうど二人が戦う前兆のところだった。倫の腕に

は炎が、村上の腕には電流が宿る。一央は倫堂屋まで走り出した。
　そのとき一央はとてつもない悪寒を感じ取った。思わず足を止める。振り返ると、倫と村上も固まっていた。いや、村上の方はしきりに何かを喋っている。
「なんだと！？　退がれだと！？　なぜだ！」村上は体と持ち上げて突き出した電流を宿す腕は倫に向けたままで、顔だけ右肩を見ている。目を凝らすと、村上の右肩に白い物体が乗っている。一央は、有里沙といたときに襲ってきた白いどろどろした人間のような人間ではない物体を思い出した。「……。たしかに理は適っているが、あいつだけは見逃せん。少し待て。……。ああそうだ。……。……貴様、ロバと言うなとあれほど……。……。だから私をロバと称するのはやめろ！　わかった退く！　そこで待っていろ！」
　村上は怒りで震える顔で倫を睨みつけた。村上の頬が紅潮している。「……近いうちにまた来る……。」
　そう言うと、村上は踵を返して倫堂屋とは反対側に去って行った。村上の姿が小さくなっていく。
　倫は深いため息をつくと、両手を胸元まで持ち上げて炎を消した。倫が体の向きを逆転させ、一央に向き直った。その顔には疲労の色はなく、むしろ生き生きとしているが、どこか悲しい笑みをその口元にたたえていた。
「少し時間を借りれないか？　いくつか……説明しなくてはいけないことがあるようだ……。行こうカズ」何かを戸惑い、迷っているかのように倫は一央に言った。

第一部　定義（8）

＃

倫堂屋は二階建ての古い木造建築だ。一階は物置、人が暮らしていくのは二階のみという変わった建物だ。倫がここの村に引っ越して来たときに、ちょうど誰も住んでいない取り壊すだけの予定の建物だったので、村にとっても倫にとっても都合よく入居できた。一央は今だにこんな辺境の片田舎に倫がわざわざが引っ越して来た理由がわからない。聞いてもまともに相手にされずに、いつの間にか会話の中身をすり替えられている。何か話せない、もしくは話したくない理由があるのだろうか。

一央は夕暮れの中、軋む倫堂屋の入口へと続く階段歩いて上った。結構と急な角度の階段だ。少しでも足を踏み外せばただではすまないことが目に見えている。一央は顔を上げた。夕焼けと重なる倫の後ろ姿が見える。先程、人間離れした戦いを繰り広げた倫。自分の全く知らない一面を持っていた。今までずっと、出会ったその瞬間からずっと隠していたのだろうか。当然と言えば当然だ。だが、何か釈然としないものがあるのはなぜだろうか。

倫が立ち止まり、一央も立ち止まる。倫がドアを押し開けた。一央も倫の後に続いて中に入る。むわっとした空気が鼻をさす。埃が宙を舞っている。中には所狭しと置かれた値札のついた商品と、長机が一つ。高い位置にある窓から差し込む夕日が宙に幾筋もの道を描きだした。倫は部屋の奥にあるドアまで進むと、こちらを振り返って聞いてきた。

「コーヒー飲むか？」
一央は首を横に振った。そうか、と言うと倫はドアを開けて奥の部屋に入って行った。一央は近くにあった足はしっかりいているが、背もたれがぼろぼろの椅子を持ってきて背もたれを前にして座った。背もたれに腕を乗せて、そこにもたれ掛かる。
奥の部屋から赤いマグカップを片手に一つ持った倫が出てきた。倫は長机の上に足を組んで座った。マグカップの中はコーヒーだろうか。倫が熱そうにすする。
一央は倫が話を始めるのを待った。こちらから勝手にしつこく始めるのも駄目だろう、と、村上が去った直後の倫の悲しそうな顔を思い出しながら一央は考えた。しばらく部屋には倫のコーヒーをすする音だけが響いた。
数分たった頃、自身の中でようやく決心がついたのか、倫が重たい口を開いた。
「何から話せばいいのか、正直わからない。だから悪いがまずオレの自己紹介からする」ハハッと倫が笑った。「あのときの自己紹介に少し付け足すくらいなんだがな。オレの名前は知っての通り、納藤倫。ここ、雑貨屋兼便利屋の唯一の店員にして店長だ。住まいはここの倫堂屋。田舎で悠久の時を過ごす、ただのお兄さんだ……」
倫が言葉を詰まらせた。マグカップを口に運ぶ。一央は次の言葉を待った。恐らくは、倫が霊媒師とやらとどういう関係なのかについてだろう。
倫がマグカップを口から離した。両手でマグカップを持ち、座っている膝元まで下ろす。一央の方は見ずに、マグカップの中身を見ている。「……オレは、霊媒師だ」倫が顔を上げ、一央の目を真っすぐに見た。「正しくはオレの一族が霊媒師だ。昔から代々続く名門で、世界中の霊と霊媒師に関する重要な書物について護衛をしてきた。時と場合によるが、必要とする者に見せ、役にたててきた。言わば司書だな」倫がもう一度コーヒーを口にした。「ふう……。歴史は長い。発端は平安時代。終わりはない。次の代へと繋いでい

く。」
一央は椅子を前に少しだけ倒した。「へー。倫はそういうやつだったんだ……」
倫は少し驚いたようだった。
「意外と驚いたりはしないのか？　オレはカズやアリサとは全く違う世界に生きる人間なんだぞ？」倫は手元のマグカップを見つめ、小さく笑った。「そうか……。よかった……。オレもここに来て、カズたちと触れ合っているうちに変わったのかもな。……いや大分変わったな」
カズは頭をかいた。「えーと、倫？　何があったのか知らないけどさー……」
倫はまだマグカップを見つめたまま何やらぶつぶつ呟いていた。時折ふふっ、と笑い気持ち悪い。「そうか……。ああ……。……ふふっ」
「まずは人の話をちゃんと聞けっ！」一央は近くの赤茶けた小さな木のテーブルに転がされていた熊のぬいぐるみを手にとると――熊は舌を半分だけはみ出していた――倫に向かって投げつけた。ぬいぐるみは倫の頭に当たってこぎみよい音を立てる。倫の顔がのけ反る。「くは」その際、倫は声を漏らした。
一央はもう一度椅子に座り直した。組んだ腕を乗せるぼろぼろの背もたれが軋む。「とりあえずだけどさー倫」一央が目を険しくさせ、唇を尖らせて言う。「何か倫は勘違いしてるみたいだけど、オレは霊媒師なんて少しも知らないからな？」
「はっ？」倫が間抜けな声を出した。腰掛けていた長机から思わず倫は立ち上がった。「……知らない？」
一央は無言で頷いた。
しばらく放心したかと思うと、どっかりと長机に腰を下ろした。埃が舞い上がる。「まじかよ……」
「まじです。残念なことに」間髪入れずに一央が言った。
倫はコーヒーの入ったマグカップを持っていない左手で額を押さ

えた。どんよりした空気を全身から醸し出す。そのまましばらく倫は動かない。たまに口を醜く歪めてはすぐに戻す以外は。
一央は立ち上がった。座っていた椅子を持ち上げる。そのまま振りかぶった。
「なあカズ……。もし、もしオレが……」倫は目だけを上げて一央を見た。一央は木の椅子を振りかぶっていた。慌てて倫は上体を起こす。「待て！　待てカズ！　危ない危ない！！」倫が両手を前に突き出してやたらと振る。
一央は椅子を下ろすと相変わらず背もたれを前にして座った。「……。とりあえず言うと、オレは霊媒師なんて何がなんなのか全くもって知らない」一央は心底呆れた気分になった。「いい加減そのヘタレなとこ治んないのか？」まあそこが倫のいい部分なんだけど、とは思っても一央は口にしなかった。
「ヘタッ！？」倫が衝撃を受けた表情をするが、今度はすぐに元に戻った。「……まあようするにだ。オレら霊媒師ってのは霊に関する仕事をする。仕事と言っても様々だ。オレみたいに霊に関する蔵書の司書をしたり、世界各地の情報を仕入れたりするサポート側や、先陣切って危険な霊を滅ぼしたりして世界の均衡を保つ者、本当に様々だ。霊は何？　……ああそうか。わからないんだもな。」倫はマグカップを長机に置き、膝の上で両手を組んだ。
「霊とは死んだ生物が未練などの強い意識によって、そのようなものになった存在だ。一応この世に存在しているが、普通に暮らせばまずお目にかかることはないだろう。彼らは希薄だ。この世に存在を許されないもの達。しかし、認められれば存在できる。ただし認められた範囲でだ。例えば……、そうだな。カズ。カズはオレからこんな話を聞く前は幽霊が本当にいると信じていたか？」倫が再度マグカップを手に取り、それでカズを指した。
カズは首を振った。「あんまり信じていなかったかな。でも居て欲しいとかそんな感じのことは思ったことあるけど？　信じてもいるし信じてもいない。まあオレは一般的な半信半疑かな」

「そうだな。大抵の者がそうだろう。心の底では若干ながら、かつ、どれだけ認めようとしなくとも無意識のうちに霊の存在を認めている。ならばどこに？　ああ、そうだ。その通り。夜中やただの暗がり、または墓場とかがセオリーだな。ならばカズ。自分達の存在を許されたその安全地帯である空間から霊が出てきた場合、どうなると思う？」

「それは……。つまり許されない場所に出るって事？　まあ何かしらの事は起きるんじゃない？」カズが言った。

「まあたしかにそうだがもっとましな回答を……。それでだ。一歩でもその空間から出ようものならそのものは消滅する。文字通り綺麗さっぱり消えてなくなる。この世からいなくなるんだ。まあ元より死んだ存在。在るべき場所に還るだけなのかもなあいつら……」

倫は深いため息をついて後頭部をかき、天窓に顔を向けた。差し込む夕日が倫の周囲に落ちている。

「今日会ったやついるだろう？　あの村上とかいうやつ」倫は一央に顔を向けずに聞いた。

「うん。あのロバとか言いながらどこかに行った人でしょ？」

#

鬱蒼としたどこかの森の中で、ローブを着た一人の男が唐突に盛大なくしゃみをした。

「……誰かがオレの噂をしている」

黒い革手袋を履いた右手で鼻を啜りながら男は言った。

「ふっ。私も有名になったものだ」

男は腰に手を当て、独り言を言いながら不気味に笑い続ける。

「あはは、あはははは。あはははは！　……はあ……。……そんなに都合いいわけないか」
今度はうなだれる男だった。

#

「その人がどうかしたのか？」一央が倫に聞いた。
「あいつも霊媒師だ。あの様子だとかなりの凄腕だろう。七歳で使い魔を作りあげたと言っていたし。ってかカズ！　あいつと一度会っているのか！？」長机から倫が身を乗り出してきた。
「？　なんの事？」
「村上はカズにオレに伝言を頼んだと言っていただろう！　何もされなかったか！？」
一央は心底嫌そうに顔をしかめた。「心配してくれるのは嬉しいけどさー、そんな大袈裟に心配されたらこっちも気が休まらないって。いつも言ってるじゃん」
「カズに何かあったら大嶋さんに何て言ったらいいんだ！　アリサも心配するぞ！」倫が叫んだ。
「あーはいはい。わかったから静かにしろ」カズは手近にあった海胆――――らしき物？――――の貯金箱を倫に投げつけた。
「そういや……」カズは顎に指を当てて上に視線を上げた。「今日襲ってきたあいつ、オレと会ったときはおかしな技使ってきた……ていうか、オレ今日だけで色んな人に襲われているような」一央は村上の他に、ガラスのキューブを渡してきた美少年を思い出した。
頭に刺さった海胆の貯金箱を倫は痛そうに引き抜くと、それを長机に置き、気を取り直すかのようにマグカップを口に傾けた。しか

しすぐに何かに気づいたように口を離す。どうやら空になっていたようだ。倫はマグカップを海胆の隣に置いた。
「おかしな技ってあれか？　えーと……。ほら、電撃飛ばしたりとかか？　まあ基本霊媒師は炎等の元素を出現させ操ったり、術を使ってオレみたいに小さな熱球を出したりもできる」
「ううん。雷は倫と村上が戦いそうになったときに初めて見た。村上と最初に会ったとき、名刺を貰ったんだよ。名刺をあいつの手の平から取る瞬間に嫌に寒気立って、そうしたらあいつの手の平に白いどろどろした……なんて言うかこんなの」と言い一央は軟体動物みたいに腕をくねらせた。
「全然わかんねえよ……」倫は呆れたように半眼にした。
「あ、でもアリサと一緒にいるときに森で―――」
一央が何かを思い出したのか、逆向きに座っている椅子から身を乗り出したときだった。
「倫さん？」
少女の声が狭い倫堂屋に行き渡った。ちょうど一央の右後ろの外に繋がるドアからだ。一央が振り向くとその先には、一人のセミロングの少女がいる。癖毛なのか、髪先は少しくるりと曲がっている。十五歳の一央より一回り小柄だ。
「あなたもいたのですか」少女は一央に半眼の瞳を向け、小さな口で言った。
少女は丸めた手を空洞ができるように組み合わせていた。力を入れすぎているのか、少女の指先は手の甲と比べると白い。
「やっ、悠理」一央が右手を挙げながら言う。
「……」悠理は一央の顔を無言で眺めた後、倫に視線の先を戻した。
「倫さん、変わった物を拾ったので持って来たのですが」そう言って悠理は両手を差し出す。
「シカト！！」一央は思わず叫んだ。
悠理は反応を示さずに両手を突き出したままだ。
「これもシカトかよ……」

一央の挙げていた右手が力無く折れた。一央は涙をダーッと流す。
倫は長机から立ち上がり、悠理に歩み寄った。途中、一央の肩を哀れみを込めて優しく叩いて行くのを忘れない。
「その手で大事に捕まえているやつか？」倫が聞いた。
悠理は、頭一つ分と少しだけ身長差のある倫を見上げながら、小さく頷いた。両手を徐々に開いていき、手の平の上の物を倫に見せる。そのとき、倫の顔が強張った。先程とは打って変わって真剣な面持ちになる。倫の隣に座ったままだった一央は立ち上がり、悠理の手の中を覗き込もうとする。座ったままだとちょうど見えなかったのだ。
「どうしたの？　また何か変わったおかしな物でも……」
瞬間、一央の体が硬直した。その半眼で悠理に睨まれたのだ。逆三角形の小さな口は動いていないが、言わずとも何が言いたいのかが、悠理の発する雰囲気で分かる。
「……」
「……」
唐突に倫が悠理の頭に手を置いた。悠理が顔を上げる。
「今だけ、見せてやってくんないか」そう言うと倫は悠理の髪を優しく撫でた。
渋々ながらといった感じで悠理は頷いた。そして一央に眼を向ける。
「見たいですか？」
一央が頷くと、そうですか、と言い、悠理は警戒を解く。
今度こそ一央は悠理に近づいて手の中を覗いた。
「っ！　これって……！」
一央に急な寒気が襲ってきた。思わず倫の顔を見遣る。倫は難しい顔で悠理の手の平の中のものを見ていた。一人だけ悠理は不思議そうな顔をしている。
悠理が開いた両手の平の上には、白い、どろどろとした、あれが乗っていた。有里沙と森の付近にいたときに襲って来て、そして村

上の名刺を取ったときに手の平にいた、あれだ。

第一部　定義（9）

「たしかに今持って来たものはいつもと比べて変わったものですね。なぜか少しばかり冷たいですし」悠理は手元を見ながらいった。「どうするのですか？」悠理がふと顔を上げて倫を見る。

悠理と目を合わせると倫は、自分の腰の辺りの上着を捲くった。ベルトにぶら下げてあった白い手袋を取って履き、悠理の手元からそれを受け取る。

「オレが預かっておく」倫も自らの手の平に置き、柔らかい笑顔を浮かべながら悠理に話し掛けた。「どこで見つけた？」

どろどろのあれを倫が受け取り、悠理から離れたからだろうか。すぐに悠理の白かった指先がほのかに朱色を取り戻していく。悠理は所在なさげに両手を下ろす。

「ここを少し通り過ぎた所で見かけました。発見した当初はこの状態よりも少しばかり大きかったのですが。来る途中で小さくなったみたいですね」

「助かった、ありがとう」

「このような意味不明なもの、何か用途はあるのですか倫さん」悠理は背後の外に通じるドアに向き直りながら言った。

「何言ってんだ。あるさ」倫は空いている左手を腰に当て、苦笑しながら言った。「どのようなものであれ、どのような違いがあろうと、大切にしなければいけないという点は変わらない」

悠理はドアノブに手をかけた。「なんでも、ですか？」

「ああそうだ。ほら、どこか行く場所があるんじゃなかったのか？」

「帰るところです」悠理はドアを開けて外に出た。途端に多量の夕日が流れ込んでくる。

「なら村長さんによろしく言っといて――――」

一央が椅子を押しのけて突然立ち上がった。「送ろうか！？」

「結構です」悠理はキッパリと断った。

「……友人を大切にする事も必要な事だぞ」倫が軽いため息まじりに言った。

#

「生物は老いていつか命が尽き、彼らの後には子が残る。そして子がまた子を産み、次へと繋ぐ。死とは恐ろしいものだが、避けて通る事は出来ない。世界はそうして巡っている———」

夕焼けに染まる倫堂屋の階段を下り、一央と倫は帰って行く悠理を見送った。柔らかな風が吹く。

「それでもどうしてもその流れからはみ出すものがいる。そいつらは、まだ生きていたい理由があるんだ。欲、未練、義務感。オレ達霊媒師は、そういうしがらみから彼らを解き放ち、安らかに流れに戻す」

倫は手袋を履いた両手の上に乗せてある、悠理から受け取った白いそれを胸元まで掲げた。すぐに倫の手元に小さな火がともり、それを包み込む。見る間にそれは小さくなっていき、火と共にすっと消えた。

「親しい者であろうとそれは変わらない。……オレはまだ、自身の中で決心がつかないよ」

倫は腰に両手を当て、流れていく風の遠くを見ていた。

「カズ。オレが今消滅させたのが霊だ。人生を狂わす道化師———。今のは安全地帯からはみ出した霊だが。普段なら自動的にすぐに消滅するはずなのに……」

倫は傍らの一央に向き直った。「今ここには異変が起きている。それは多分、お前がいつか直面する異変だ。もしかすると、今回の

異変がそうなのかも知れない。結果として、大切な何かを失う可能性がある。お前はどうする、カズ」

一央は俯いた。なぜか一央は、倫と村上が衝動寸前のときに炎に消えた、あの何も映さない漆黒の瞳を有する青年が思い出された。

「オレも……誰かを失うのが怖い……」消え入りそうな声を絞り出す。「ならオレは、全力で、そいつを救い出す……。オレの力じゃ及ばないかも知れない。意味のないことかも知れない。だけど、オレは……諦めたくない……」一央はゆっくりと夕焼けに顔を向けた。

倫が小さく笑った。「お前ならきっとできるさ……。アリサもいるしな」

沈黙がその場を支配した。重苦しい空気を夕日が縫っていく。二人には濃い影が纏っていた。

第一部　定義（１０）

＃

しばらくすると、日はほぼ沈み、地平線にかけらが見えるだけとなった。一央はようやく帰路についた。今日は、何かと心配だからと、倫も一緒に連いて来ている。

「なあ倫」

「どうしたカズ？」

一央が隣を歩く倫に話し掛けた。「倫と村上が直接会う前に、倫の炎に取り込まれた青年のことなんだ」一央の視界の隅に曇った倫の顔が捉えられた。「あいつって……。その……。死んだ、のか……？」

「いや。死んではいない。ちゃんと生きている。元の在るべき場所に還っただけだ」倫は真っ直ぐ前方を見据えたまま答えた。

「じゃああいつはどうなったんだ！？　炎に取り込まれていっただろ！」一央は倫に向き直りながら言った。

「いやにあいつに執着しているんだなカズ」倫が立ち止まった。「あいつはオレの使い魔だ。オレ自身の大量の血液を使い誕生させる。あいつは炎に取り込まれた、というよりオレに取り込まれたという感じだ。オレの血がオレに還ってきただけだ」

倫につられて立ち止まった一央が静かになった。その頭に倫は手を乗せると、言葉を繋げる。「そんなに気にするな。オレはやつを殺してなんかいない。まあ、最初は消すつもり満々だったんだけど

な……」苦笑をまじえながら倫はそっぽを向く。
一央も思わず笑った。「というか、自分の血で作るって……」一央は頭に乗せられた手を振り払いながら訝しそうに倫を見た。
「いや待て。信じられないかも知れないが本当だぞ。作り方は簡単。まず適当な人形を用意。次にそれに式を書き込む。そしてラスト。主人の血液を大量に染み込ませる。いくらでも吸うからな。気をつけないと死ぬ。だがいざ作るとなると相当の技術が必要だ。そう考えると七歳で使い魔を作り上げたあいつは相当ヤバいんだ」
倫は再び歩き出した。一央も置いて行かれないように歩く。
「使い魔って言うわりにはあのときあの人は必死に逃げようとしていたけど?」一央が聞いた。
「あいつも言っていたが、先代の記憶があるからな。そのときに何かあったんだろう。ああそうだ。ついでだから説明しておく。霊媒師とその使い魔の力についてだ。彼らは皆、何かのエネルギーを変換して他のエネルギーに変える」
隣を歩く一央がすぐ傍の森に駆け寄った。そのあとを歩いて追いながら倫は長い説明を続ける。
「例えば霊媒師の場合。彼らは自らの体内にあるエネルギーを変換し炎や雷、氷、気体、物質などの元素に変える。人によって変換できる量はまちまちだ。当然、自分のエネルギーを削るわけだから一度に使い過ぎれば命の危険に関わざるをえない。まあ体力と同じ。時間が経てば回復する。ついでに、霊媒師は各個人、それぞれ一種類の元素しか扱えない。例えば、オレは炎というようにな。逆に呪文は体外のエネルギーを変換するが、そんなに特徴があるわけではない。あくまで補足だが、各霊媒師が作り出した使い魔には、その霊媒師の元素による攻撃は効かない。効果は全く見受けられない。自分の元素の決め手となるエネルギー気質の情報が詰まった血液が元となって誕生した使い魔なのだから、当然と言えば当然か」
一央はしゃがみ込んで何かをいじっている。倫は構わず話しつづける。

「呪文が外のエネルギーを利用するのと同じく、使い魔も外からエネルギーを吸収して活用する。しかし彼らの場合、炎を出したりとかは出来ないんだ。体外で得たエネルギーは体内で体内のエネルギーに変えられる。わかりやすく言うのならば、身体の能力を飛躍的に上げるんだ。それは計り知れない。あいつは村上に頭を吹き飛ばされても問題なく回復したしな」

一央が倫に背を向けたまま立ち上がった。何かを両手で持ち上げている。

「オレ達霊媒師はそういうことはできない」倫は一央の背中に語りかける。

そのとき一央が倫の方を向き、両手を突き出した。倫にぶつかるすれすれまで突き出された両手に捕まれていたのは、一匹の猫。猫はあどけない顔で前足を振り上げる。爪がキラリと光る。そして一気に振り下ろされる。

倫の悲鳴が上がった。

倫は顔を手で覆う。指の隙間からうめき声が聞こえてくる。それを見た一央が我慢しきれないといった様子で笑い声を零した。

倫が素早く態勢を立て直した。「いきなり何すんだカズ！」顔を真っ赤にした倫が叫ぶ。

「何と無くに決まってんじゃんそんなの」何を当たり前な事を、と言いたげな様子だ。ニャー、と猫が鳴く。

倫は目にイライラをちらつかせる。「さっきも言ったが、霊媒師がいくら頑張ろうと自身の強化などできないっ。つまりオレは使い魔みたいに自然治癒能力を使って回復なんかできないんだよっ」縦縞模様になった顔を指しながら言う。

「そんな小難しい話はいいからさー」猫を持ち上げながら言った。

「も一発いっとく？」ニャ、と猫は片方の前足を上げる。

倫は体を一瞬震わせ、そのまま硬直した。青ざめた顔は白目を向いていた。

「冗談だよ」一央はしゃがんで猫を地面に放す。猫は身軽に着地す

ると、森の中へと駆けて行った。「倫。お前が普通の人間じゃないことは理解したつもり。だからもういい。これ以上は何も言わなくていい」一央は倫の顔を見ることなく言った。

倫は意表をつかれたようだった。呆然としている。

しかし、すぐに柔らかい笑みを取り戻した。「そうだな……」

一央は立ち上がり倫を見ると、すぐに家へと歩き出した。倫がその後を追う。「帰ろう。アリサが首を長くして待ってる」倫は一央の背中に言葉をかけた。

第一部　定義（１１）

＃

地平線にはかけらとしか夕日が見えず、嫌でも夜が近づいている事を体感させられる。有里沙は、有里沙と一央が住むアパートの一央宅にあたる玄関で、ドアノブに手をかけた状態から動いていなかった。どのくらいこのようにしていたのだろうか。だんだんと自分の手が見えにくくなってきていた。

――私は……。カズはっ……。

有里沙の頭の中では堂々巡りが起きていた。何度同じ思考を繰り返しても抜け出せない。繰り返し繰り返し……。

今思えば、あのとき、カズは怯える私を少しでも慰めようとしていたではないか。それなのに私は逃げ出してしまった。カズから逃げた。私が一方的にカズを信じきれずに。

だって、カズに知られてしまうかも知れない。いやだ。カズはきっと、本当の私を知ったら、私を拒絶する。いやだ。カズに拒絶されるのだけは、いや。

有里沙は握ったままのドアノブを見つめた。いつも一央が使っているドア。それだけで、この固いドアになぜか温かい感情が湧く。

カズは私から逃げる。だって、だって私は……。

でも、あのときカズは私を慰めようとしてくれた――――。

同じ思考を何度繰り返したことだろう。何度も何度も行ったり来たり――――。

「アリサ？」横の方から声がした。
そちらに顔だけ向けると、一央と倫が錆びだらけの階段を上って来ているところだった。有里沙は自分の体が強張るのを感じた。
「……」有里沙は何も言えなかった。
一央と倫が近寄ってくる。少しばかりの赤い夕日が二人に影を作る。
「どうしたのアリサ？　母さんに言えば中に入れてくれると思うけど……」一央は閉じたままの自分の居住区のドアを見た。
有里沙は思わず目をみはった。ドアノブを掴んだままだった右手が、するりと落ちる。いつも通りの一央に有里沙は驚かされた。
――カズは……私を……、拒んだりなんかしない……。
もしかしたら表面上だけかも知れない、と内心では有里沙は理解していた。それでも有里沙は、込み上げてくるものを抑え切れなかった。
一央に抱き着き、その肩に顔をうずめる。一央は驚いたようだった。一央の段々と速くなる心臓の鼓動を感じる。
だけど私を拒絶することなく、私は思わず涙がこぼれた。
涙は有里沙の頬を伝い、一央の肩を濡らす。
「ア、アリサ！？」一央は焦ったようだった。
一央は後ろの倫に助けてくれと言わんばかりに顔を向けた。倫はそれを無視し、親指を立てた右手を突き出してきた。にやけてる。
一央は顔を夕焼けよりも赤くし、何が何やらわからないといった様子で有里沙と向き直った。有里沙はまだ一央の肩に顔をうずめたままだ。たまに肩が揺れる。
一央は恐る恐る有里沙の頭に手を置き、出来るだけ落ち着いて一度撫でた。もしかすると手先が緊張で小刻みに震えていたかもしれない。二度、三度と続ける。
「アリサ……」有里沙の耳元で一央は言った。だが、一央は後に続く慰めの言葉が見つからなかった。何も言えない。
一央は優しく有里沙の頭を抱いた。こうする事しかできなかった。

ふと、一央は有里沙の震えが弱まった気がしてきた。大分落ち着いてきたのか、有里沙はもう泣いてはいない。
「大丈夫だよ。オレは側にいるから」言ってからハッと気づく。一央は無意識に言っていた。
「ああ」有里沙が有里沙にしては珍しいしおらしい声で言った。「その……。あ、……ありが、と……」
一央は有里沙の頭を抱いているため、その顔を見ることはできないが、きっと赤らめているに違いない。自分と同じように顔を赤くしている有里沙を思い浮かべると、なぜだか一央は嬉しくなってくる。
倫がため息混じりに声をかけてきた。「オレもいるんだが？」
一央は後ろにいる倫をジト目で睨みつけた。ちょっといい雰囲気だったのに、と。
倫はむっとした顔つきになった。空気が読めるのか読めないのか。ヘタレもいい所だ、と一央は思わずにはいられない。
倫は一央と有里沙の頭に手を置き、くしゃくしゃと撫でる。「オレが二人を護ってやるよ」妙に真剣な目つきで言う。
「あのなー倫。さっきから空気読めって———」
有里沙のすぐ近くで一央と倫が他愛のない日常を繰り広げる。有里沙はいつもとちっとも変わらない、そんな二人を見ていると、自然と笑みが零れた。
「ありがとう。私は、嬉しい……」
誰にも聞こえない小さな声を、有里沙は一滴の涙と共に零した。

第一部　定義（１２）

＃

月明かりが差し込むアパートのある一つの部屋で、倫は椅子に座り腕と足を組んでいた。明かりといえるものは月明かりただそれのみ。床に倫の影が伸びている。

今日一日だけで――しかも夕方という短い時間の中で――様々な非日常的な事柄が多発した。倫の短いながらも波瀾万丈であった人生で、こんな事例は彼自身初めてだった。

あろうことか、認められた安全地帯を離れ、生の世界に踏み込んだ霊が多数存在している。ほとんどの霊が理に従い消滅したが、悠理が拾ったという霊だけは違い、倫が手を加えるまで消滅に抗い続けた。

――――有り得ない。

倫は嫌なカンがよぎった。

――――もしかすると、あれは普通の霊ではなく、特別な変異が起こったものなのか？

倫は顎に手を当てた。

――――いや。そんな事例は報告を受けていないし、なにより蔵書の中にもそんな異常なことはない。

しかし、今日のように、思わぬ事が突然起きる可能性もいなめない。過去にそのような事があっても記録されなかったかもしれない。そう考えるときりがなかった。

――あの空間が人々に、霊の存在を認められていたとは思えないし。
すぐ傍のベッドで眠る一央が寝返りをうった。静かな寝息をたてている一央が倫の視界の隅に映る。
――まさか……あれか……？
倫は音もなく立ち上がった。そのままベランダに出る窓際まで近づき、引き返す。
――それはない。オレ自身何度も検証したが、そのような存在は発見できずじまいだ。
部屋を横断し、クローゼットの正面に立つ。
――だが、だからといって否定できない。見たことがないのは揺るぎない事実だが、見ることができていないだけというのもまた事実。
倫はまた窓際に歩み寄る。部屋を行ったり来たりと何度も横断する。
――本来の死後の世界、混沌とした異世界か。
部屋の中心で倫は立ち止まった。
――絶対的存在の死後の存在と、流れから外れた絶対的非在の霊、か。
倫は両手を下ろし、月明かりで染まった部屋から月を眺めた。今日の月はとても綺麗だった。こんなちっぽけな存在の自分には神々しすぎるほどに。
倫は再び椅子に座り直した、そのときだった。
倫はひどい寒気がした。
椅子から乱暴に立ち上がる。急いで辺りを見渡す。辺りには熟睡する一央以外、何か特別なものは見られない。むしろこの強烈な刺すような寒気は――。
ベランダの方から再度、今度はより強く寒気を感じた。倫は駆け寄り等身大の窓を開け放ち、ベランダに入る。
一央の家のベランダに異常はなかった。あったのは隣に住む有里

沙の家のベランダ。そこには、大量の霊と思われるものがいる。
「なっ！」
ある円柱の空間に集まり、その中心は霊の壁に遮られ見えない。はみ出した霊がその周りをうろうろとしている。
信じ難い光景だった。
希薄な存在である霊が、たとえ存在を認められた夜であろうとこんなにも密集して現れるとは。更に言えば、現れている量が半端ない。
集団から逸れた霊の一つが倫の方へふらふらと浮遊してきた。行く宛もないかのような飛び方。それでも倫に辿り着いた。
倫の右肩の手前に来た途端、その霊は燃え上がった。音も何も聞こえない。ただ燃え、そして消えた。
「どうなってやがる……」倫が険しい声で言った。
有里沙宅のベランダに円柱状に集まる霊は、ただ闇雲にその空間を漂う。これ以上増える気配はないが、去る気配もない。留まり続けている。
なにより倫が気にしたのは、霊が密集している場所が有里沙の家ということだ。
「今日の異変もひょっとして……。お前が原因なのか、アリサ？」
突然、ただ浮遊していた霊の集団が全て、文字通り消し飛んだ。彼らの儚い純白の体が散り散りになって飛散する。天井や床にぶつかって消えるもの、ベランダの外に落ちるもの。円柱状に集まっていた霊がいなくなり、その中心が見えた。
倫は驚愕に目を開かざるをえなかった。
「こんばんは倫。今夜はお月様がとってもキレイよ……。フフフ」
そこには、一人の少女がいた。

第一部　定義（１３）

その姿を捉えた瞬間、倫は昔のある会話が頭をよぎった。この村に来る事になった原因でもある村長の懇願と不安の思い。

――有里沙という女の子じゃ。

少女が倫を見た。倫にはどうしてもよく知っている少女に見えてしまう。

――どうも彼女は幽霊らしいとな。

真っ白い長髪、雪よりも純白な肌。月明かりを浴びてきらめいている。ふわりとその長髪が広がった。

――彼女の観察を頼みたいんじゃ、納藤さん。

少女が右腕を水平にゆっくりと上げた。突如、倫の左頬に鋭い痛みが走った。予期せぬ痛みに倫は肝を冷やす。痛む頬からだんだんと熱いものが滲み出る。

――彼女が、災厄を振り撒かぬように――。

倫と有里沙に似た少女が目を合わせる。その少女は妖艶な笑みを浮かべ、ただ静かに右腕を水平に保つ。
倫は突然刺すような気配を感じ、咄嗟に両手を前に突き出した。厚い炎を纏っている腕だ。
瞬間的にその両の手の平が切れた。切れ込みが入り、流血する。倫が苦痛に顔を歪める。炎は切れ目に沿って消えていた。
少女はクスクスと笑う。「あら？　起きていたのね倫？　返事がないから寝ちゃったのかと思っちゃったわ。立ちながら寝るなんて、変な人」笑いながらも右腕を下ろした。「とってもお月様がキレイなの。寝ちゃうなんて勿体ないわ」
倫は炎を宿らせた両手をそれぞれ固く握り、臨戦体制をとった。
「お前は……アリサ、なのか……？」
少女は心底信じられない、という拍子をぬかれたような顔をとった。「何を当たり前の事を聞いているの？　私はアリサ。それ以外の何者でもないわ。アリサはアリサ。それよりもねえ、お月様がキレイなのよ」自らをアリサと称する少女はベランダの手摺りに身を乗り出した。
倫のこめかみで一粒の汗が月光を浴びて光った。
———くっ……！
倫は焦り、迷っていた。どうすれば良いのかが分からない。目の前で月を眺める少女は一体誰なのか。あの数の霊を一瞬で消滅させた所を見ると、ただの人間ではない。だとすると、村長の言葉が甦る。
———どうも彼女は幽霊らしいとな。

その可能性を否定はできない。
――――ならばどうする！？
倫は苦渋の表情を浮かべ、舌打ちをする。顎を引いて少女を睨みつける。
目を輝かせ、月を眺めていた少女だが、ふとした瞬間に冷たい顔付きに変わる。そして少女はゆっくりと倫に向き直った。「どうして？」左手は手摺りを掴んだまま、少女は倫と対面する。「どうして？　見て……。お月様を。輝いている、お月様を見て！　見て！！」
少女は両手を胸の前で組み合わせ、突き抜けるような叫び声を上げた。声が広がるのに合わせて衝撃波も伝わっていく。何かが割れる音で、硝子が割れたのがわかった。
倫は咄嗟に血が滴り落ちる両手を前方へと伸ばし、早口に呪文を唱えた。
有里沙宅のベランダ周囲の窓、床、手摺りを球状にうっすらと何かが纏めて包み込んだ。透明であるが、その部分だけ空間が歪み、光が屈折している。
途端、耳を突き破るかのほど強い音が響いた。爆発音ではないかとさえ思える。
倫は肩を大きく上下させ、荒い呼吸を繰り返す。全身から汗が吹き出す。
倫は抗いもせずに膝をベランダの床にぶつけた。がっくりと肩を落とし、両手を床につける。汗は留まることを知らず、頬を伝っては落ちていき、あるいは服をぐっしょりと濡らす。
倫は顔を上げた。割れた硝子の破片が見えた。しかし、それ以外は何もかも先程と変わっていない。少女は落ち着いたようだったが。
――――上級のっ、空間っ、呪文でようやくたった一人のっ、少女の声を止めっ、られただと……！？

第一部　定義（１４）

再び妖しい笑みで倫を見つめる少女は、汗一つかいていない。涼しい顔をし、その瞳を細める。

倫は荒い呼吸が止まらない。準備もせずに急に上級呪文を使ったせいだ。苦しそうに息を吐いては吸う。

更に今のは防御系統の呪文ではなく、包み込んだ相手を極度の圧力で押し潰すという圧倒的に危険な攻撃系統の呪文だ。それを相殺する――しかもただの少女の叫び声で――など、有り得ない事だった。

倫は壁に手をついて体重を預けながら立ち上がった。「お前……。その感じ……。一体、誰だ……？」

倫がずっと気になっていた事だ。普段の有里沙から感じるやや冷たい空気が、全く感じない。集まっていた霊が消えてから何も感じなくなったのだ。むしろ何もかもが混濁したものが感じられる。

少女がクスリと笑った。「フフフ。そうね。倫は見たことがないかもしれないわね、本当の私を。特別に赦してあげる」少女は倫の前まで歩み寄ると、倫の頬にその白い手を当てた。

――っ！！　寒気が、しないっ。

倫は驚かずにはいられなかった。霊であるならば肉体接触したときに感じるはずの生きた心地すらしない寒気がしない。普段の有里沙もしない事はしないが、今は場合が違う。

少女は、倫の左頬の切り傷に沿って指先を滑らせた。

「ぐっ」倫は苦痛に思わず声を漏らす。かなりの圧力をかけられたようだ。

次に少女は壁についた手と脇腹を押さえていた倫の手をとった。倫はバランスを崩すがなんとか持ちこたえる。倫の両手にもできていた切り傷に少女は手を当てる。

再び強い圧力がかかる。今度は声を出すのをなんとか堪える。

倫は少女が放した自分の両手を見た。あの治るには数日を費やすであろう傷が――傷跡があるが――治っていた。どうやら圧力をかけ、無理矢理接合したらしい。

――――無茶苦茶してやがる。

倫が自分を見ていることに少女は気づくと、何かを期待するかのような目をする。倫は瞬時に理解した。

「……すまない」倫が言った。

しかし少女は聞こえなかったのか、表情を変えない。

「あ、ああ。ありがとう」倫は急いでまくし立てた。

――――野生のカンか？

倫は苦笑しながら内心自嘲した。

少女の顔に歳相応の笑顔が広がる。「あなたはやっぱりいい人ね倫。素敵よ。とっても素敵」手摺りに左手を乗せ、手摺りに体を預けながら空いた右手でこうこうと光る月を指す。「ねえ倫。お月様がキレイなのよ」

「そう、だな。ああ、綺麗だ」しどろもどろになりながらも倫はこたえた。そうして自身も月を見る。

ちょうど満月だった。完璧な円を描いている。雲一つない夜は月明かりを遮るものが何もありはしない。手前の森も、遠くに見える民家も、あまつさえは空気さえも謙虚に照らし上げられている。澄んだ空気を肌に感じると、先程の少女へのピリピリした警戒心が少し緩んだ気がする。

しばらくすると、小さな足音が一つ、少女の方から聞こえた。倫が少女の方を振り向くと、少女は月ではなく倫の方を向いていた。

「今、気づいちゃった」透き通るような声で少女は言った。「あなたに自己紹介がまだなの。納藤倫。知りたい？」

少女の鋭い笑みからは否定を許さない事が読み取れた。恐ろしい笑みだ。断ればついさっきのように、何が起こるか分からない。ただでさえ今は、急激にエネルギーを使い過ぎて体力の消耗が激しいのにだ。それに、元より倫は目の前の少女の正体が知りたかったの

だ。拒む理由がない。
倫は首肯した。顎から汗が滴り落ちた。
それを見てとると、少女は五本の指を突き立てるようにして自分の胸に当てた。「はじめまして倫。私は霊よ。ただし、あなたが知っているような霊じゃないわ。霊であり霊でない」
「霊であり霊でない？　どういう事だ」倫が驚きを隠せないかのように口を挟んだ。「まさか、第三の存在か？　なら――――」
言葉を繋げるより先に倫は突風を感じ、喋る事ができなくなった。倫は耐え切れなくなり、膝をつく。すぐに突風は収まった。
月光を浴びている少女が顔をしかめた。「私がお話をしているのよ？　邪魔しないで」少女は気を取り直すように手を叩いた。「とりあえず、あなた達が何と呼んでいるかなんて知らないけど、私は霊であり、それと一緒に霊の一つ上の存在なの。分かる？　それならお次は本当の私を大公開！」少女が腕を広げる。
少女は倫が応答していないにも話を進めた。少女はしゃがみ、膝をついている倫と目線の高さを合わせる。「私はアリサ。本当のアリサ。正真正銘のアリサよ」倫の視界いっぱいに少女の顔が映る。倫は少女に鼻先を指でつつかれる。
倫には正直理解不能だった。本当のアリサと言われても、普段から有里沙の事を見ている倫にとっては不思議でしかない。たしかに背丈や容姿は似ているが、普段のアリサは髪も肌も白くない。ならば本当のアリサとはどういう事か。
「わからないの？」アリサが目の前でしゃがんだまま言った。「そう。なら親切に教えて上げるわ。こう言えばわかりやすいかしら」
アリサは立ち上がり、くるりと一回転した。白い長髪とスカートが広がる。そして今度は月の方を向くが、顔だけは倫を見ている。
「……私は二重人格者」ほくそ笑むアリサは言った。

第一部　定義（15）

＃

倫とアリサが対面しているベランダが伺える。森の境目辺りから村上ともう一人の男が二人を見上げていた。ベランダの二人には気づかれていないようだ。

「まったく……。あれが貴様の妹とはな」村上が近くの木に寄り掛かりながら言った。「兄妹揃ってなんとも恐ろしい」

「そう？　オレにはわかりえない事かな」男は村上の正面に背を向けるようにして立ち、ベランダの倫とアリサを眺めながら言う。「あんたはそこで何をしてんの、村上翔人？　そんな奥では見えるものも見えないと思うけど？」

村上は目の前の男の背中を睨みつけた。「ここからでもあそこの二人はよく見える。それと本音を漏らすと、霊である貴様に近づくことが躊躇われてな。寿命が縮むやもしれん」

男が笑った。「するとお前の姉弟子は酷いな。今ではどれほどの命が削られているのか。考えただけでゾッとするね。あの集落のやつらなんて見捨てればいいのに」

村上のこめかみがピクリと痙攣した。「ほお。お前はそんな知ったような口を叩けるのか」

「おお！？　短絡的だなあ。ちょっと待てよ」男は村上に背中を向けたまま両手を上げた。「ここでやったらばれちゃうよ？」

村上が右腕を男に向けた。一筋の電流がその腕を走る。「ばれな

い程度にやるさ。で、彼女がどうしたって？」
村上の腕から電流が飛び出し、男の膝から下を吹き飛ばした。男の体が地面に落ちる。「くははは！　どうしたもこうしたも、あいつは自ら命を削ってんだぜ？　やってらんねえよ。人生長生きしなきゃ――――」
男の頭がまるごと消し飛んだ。村上は残った男の体に近づく。「貴様に訂正を求めた私が馬鹿だった。貴様がまともな回答をするわけもない。それに貴様に頼る必要など元々ないのだ。いい加減、成仏するんだな」
村上は男の真上に手を翳す。
そのとき、地面に倒れ伏している男が立ち上がった。ないはずの両足が生えている。
「な……っ」村上は目をみはった。使い魔でもない男が、それと同じかそれ以上の早さで回復を行っている。このような霊が存在するなど、聞いたことがなかった。
頭がない男の体は機敏に動き、村上の喉を掴むと、そのまま木に叩きつけてより喉を掴む手に力を入れる。
「……っ、……！」村上の顔が一気に青白くなっていく。息が出来ていないから、というだけではないだろう。
男の頭部が復元した。現れた顔は笑みを浮かべている。「頭を狙うのはグットだが、心臓を狙わなかったのはバッドだな」至近距離で男は言った。「どうだ。苦しいか？　だろうな。それが死の苦しみと冷たさだ」
男は村上の喉から手を離した。村上の体が崩れ落ち、木の根本に座り込んだ。
村上は痛む喉を抑えながら顔を上げて男を睨む。「貴様、本当に霊なのか……？　どんな体している……。一体何なんだ貴様」
男は首に手を当て、骨を鳴らしながら言った。「化け物だよ」

第一部　定義（１６）

＃

アリサはほくそ笑む。思わず抑え切れずにそのまま高笑いしてしまった。目の前で呆然とする倫がいる。滅多に見られるような表情ではない。

「アリサが、二重人格者……！？　そんな、まさかな……」倫は自分の額を押さえて自嘲気味に笑った。

「そう思う？」倫を見下ろすアリサが言った。「だけど私は二つの私がいるわ。偽の有里沙と本当のアリサ。滑稽ね。偽など有り得ないのに」

「同じアリサの身体なのになんで髪が白いんだよ……」倫はまだ信じられないかのように聞いた。

「さあ？　わからないわそんな事。私の死に方とか中身とかが特殊だからその影響じゃないかしら」

倫はアリサの姿を目に入れる。普段の有里沙とはたしかに違ってはいるが、まだ信じる事は出来ない。倫は立ち上がった。「特殊……？」

「ええ。なんであんな事になったのか、今でもわからないわ。それにどういうことか、あのときの記憶にあまり実感が持てないの。日焼けしたフィルムを見ているみたいに虚ろだわ」アリサは俯きがちに言った。

「フフフ。昔の私だもの。今の私じゃないわ。今の私がたとえあの

儀式の結果だとしても、私は私。そういう事なのよ。だから、もうそろそろ偽の私を見ているのも飽きてきちゃったし、捨てちゃおうかなって」
「捨てる……。お前、アリサに何をするきだ！」倫が声を張り上げた。
アリサは淡々と答える。「そのままの意味よ。私がやらなくとも、有里沙がいずれ近いうちにやると思うわ。楽しみに———」
アリサは突然胸を押さえた。腰と膝を曲げ、苦しそうな顔をする。
「あああ……」
倫は何も動けなかった。何が起きているのか、現状を把握できない。
ふと倫はアリサの髪の末端が、白から黒に変わっている事に気づいた。徐々に端から黒色が白色の上を上って行く。肌の純白も、いつもの有里沙のような少し薄い肌色になって行く。
アリサは粗い息づかいを繰り返す。膝をついた。痛むのか頭を両手で押さえ込む。髪は既に全て黒に戻り、肌ももう純白ではなくなった。
「あああ！」
アリサの全身から力が抜けたのが見てとれた。がっくりとその場に腰と腕を落とす。放っておくとそのまま横に倒れるのは目に見えていた。
倫はアリサに駆け寄って体が倒れるのを押さえる。「おい！　どうした！」
アリサの小さな手が持ち上がり、宙を掴む。「私……」アリサの手が開き、アリサは自分の手の平を見つめる。「……戻った、のか……」
アリサから有里沙に代わったのだと、倫は理解した。「大丈夫かアリサ！？　というかアリサ、お前は……」
二重人格者だったのか、と後に続ける事は倫にははばかれた。聞きづらい。

有里沙は腕を下ろして完全に倫に身体を預けている。有里沙はその小さな口で何かを口ずさんだ。
「どうした？　何か――――」
「カズが……。カズが私に教えてくれた歌だ。名前とかはよく知らない。歌うと、不思議と寂しさがあまり感じなくなるのだ」
倫は何も言わずにただ有里沙の独白を聞く。何も言えなかった、というのが正しいか。
「暗い、暗い闇の中で、その歌は弱々しくも明るい光を放つのだ。私が独りのときはいつも傍にいてくれるのだ。……カズが近くにいてくれている気分になって、私は怖くない。もう一人のアリサに代わったときも、私はあいつの心の奥底で独りで歌って……」
アリサの瞳が潤み、目のはじが銀色の光を反射する。「なあ倫。私はもう少しすると、あいつに取り込まれるかもしれない。私があいつに打ち勝てば、まだ可能性はなくはないが……。残るのは本当に本当のアリサただ一人」
だんだんと小さくなっていく有里沙の声。「あいつは何をするかわからない。もしかしたら、カズを苦しめる事になる。……苦しい……。辛くて胸が痛いのだ……倫……。逃げていた私は、戻れるのだろうか……？」
有里沙の瞼がゆっくりと閉じる。小さな寝息が聞こえるあたり、どうやら眠ってしまったようだ。
「戻れるさ……。オレが、二人を護ってやるんだからよ」
倫はそう言うと、有里沙を抱き上げた。心地好い重みがかかる。倫は思わず笑みが浮かんだ。
「こんな事しているのをカズに見られたら殴られるな、こりゃ」
倫は眠ってしまった有里沙を抱き抱えながら、割れた等身大の窓を跨いだ。

第一部　定義（17）

＃

村上は目の前に立つ男に殴りかかった。殴る右腕には、弾ける電流が纏われている。
男はかわす事もなくその拳を顔面に貰う。拳が深々と沈んだ男の頭が水しぶきのように散り散りに吹き飛んでいく。
しかし、男は倒れる事なく、立ち尽くしたままだ。頭を失ってなお身体は平静を保っている。
村上は自分の陰に隠すように構えていた電撃の左腕を繰り出す。狙う先は心臓。
男の右腕が動いた。
途端、当たれば必殺であろう村上の左腕が何かにぶつかったかのように止まる。
「！？」
村上は驚きが広がっていく表情を隠せない。
男の左腕が動いた。
村上は全身に強い圧迫感を感じ、直後、身体が後方へと強制的に飛ばされた。逆らえない力のベルトに、そのままゴツゴツする木に打ち付けられる。
「うッ！」
ずり落ちる村上は、衝撃で肺の中にある空気を全て吐き出す。意識が朦朧とする。空になった肺が空気を求め、再び冷たい夜の空気

を吸い込んだ。
後頭部に生暖かいぬるっとしたものを感じ、ひどい頭痛がする。顔を上げた。霞む視界一杯に佇む男が割り込んでくる。
「ちょっと落ち着こ？　ダメだよそんなに焦って。じゃないとオレ、あんたを殺しちゃうよ？」
ポケットに手を突っ込む男が威嚇するように顔を間近に近づけてくる。
「それとも、今死ぬ？　痛くしないからさ。多分、一瞬でパーッと逝けるよ？　死にたいならさ、今オレが殺してもいいんじゃねえの？　あはっ。沈黙って、つまり了承？　じゃあさ、まず邪魔なその腕からいこうか。今すぐ捻り潰してやるよ」
男は村上から離れると、ニヤリと笑った。
村上は、もう何も聞こえない。ざらつく土、月光に濡れる草花、風に揺れる空気。そして男が一人。
男は右手を片方のポケットから出すと、広げて前に出す。男の右手がゆっくりと閉じていく。
男から刺すような冷たい空気が流れてくる。死ぬような、まさに同等の空気。
静かに村上は、大木の根本に落ちたまま動かなかった。冷酷な空気が自分を少しずつなぶるように、だが確かに包んでいく。
村上は徐々に瞼を落とし、夜の世界を断ち切った。
両腕が冷たい。恐らくはしばらくすると、この腕とはおさらば。二度と使う事はない。
水が弾ける音がした。
直後、頭のすぐ横を何かが掠めて木に食い込んでいく気配。
———死ぬ、のか……。もう、しばらくだけ、生きていたかったな。自らの命のためでは、決してない。ただそれだけが、誇りであり、心残りだな。すまない、霙……。
全身に何かが降り懸かってくる。急激な寒気に襲われ、身体が凍りつくがごとく硬直した。

瞬間、水しぶきの音と、村上の頭上を掠めて再び何かが木に食い込む気配。一つや二つではない。肩を掠め、脇を掠め、太股を掠めていく。いくつかは掠めていないものもある。
音や姿が見えないものが段々と気になり、自分の意識とは裏腹に村上は閉じていた瞳を開けていた。
嵐かと思えた。
絶対的威圧感で見下ろす男が村上の上に倒れているのを見ると、この命を縮める寒気は男の身体に触れていたためだろう。しかし、男が倒れている理由がまた、嵐と呼ぶしかなかったのだ。
弾丸の嵐。
暇なく飛んでくるそれは、男の全身を撃ち抜いては木にぶつかっていく。偶然なのか必然なのかはわからないが、村上の身体を掠めることはあっても当たることは決してなかった。
男の頭を貫いた弾丸が村上の頭の横に突き刺さり、村上は食い込んだ弾丸を見る。氷の弾丸だ。高密度の氷が弾丸の形を彩り、潰れることなく硬質な木に打ち勝っている。
「がああっ！！」
男が突然、腕を振りながら氷の弾丸の嵐に立ち上がり向き直った。
「うざいんだよおお！！」
男は胸の前で交差させた両腕を振り払い、叫ぶ。
冷たい強風が男を中心に巻き起こった。村上にも降り懸かった風は、弾丸の動きをピタリと止めて動かなくさせる。
砕けた氷が降りしきる中、男は殺気を氷の弾丸が飛んで来た方へ向かわせながら、背後の村上に話しかけた。
「少し待ってな、誰であろうと今すぐあいつの喉笛を噛みちぎって、後悔のカケラも残らないようにしてやる」
男は膝を曲げてしゃがむと、斜め前へと跳ねて行き、すぐに姿が見えなくなった。
これから一人の霊媒師と思われる人物を殺しに行った男を、じっとしたまま村上は見送った。このままこの場から動かず、逃げなけ

れば、おそらくはあの男に殺されるだろうが。それでも村上はピクリとも動かなかった。

第一部　定義（１８）

村上に当たる薄っぺらい月明かりが、頭上から聞こえてくる木の葉が揺れて擦れる音に合わせて形を変則的に変える。

「失うものなど、元々は何もなかった」

村上は、自分に言い訳を聞かせるかのように小さな言葉を語る。

「だが、師が、霙が、私のかけがえのない一番の大切なものになり、私は失いたくないという初めての感覚に陥ったのかもしれない。ただそれだけなのに……。なぜここまで身体を突き動かす衝動となるんだ……」

伸ばした膝上の手の平を見つめる。

「師匠を失ってからというもの、私はこの身一つ霙を救うのに生きてきたのに。あいつを救おうとすることすらできない。もう、私にできることはないのかな……。すまない霙……。もう少しだけ、……いや、もう一度、君に出会えたなら……」

端の部分だけが若干黄色くなった落ち葉が、頭上から数枚ひらひらと降ってきて、村上の開いた手の平の上に落ちた。

「……誰かいるのか？」

村上は手の平の落ち葉の茎を指先でつまむと、くるくると回した。そして、なげやりに指先ではじきとばした。

「……誰なんだ、そこにいるのは？」

朽ちた落ち葉がいくつか頭上の枝葉の間からまたも降ってきた。その中で、村上が寄り掛かる木の背後に、誰かがふぁさ、とマントのようななものが広がる音と共に降りた立つ。

「……こんなところにいた……」木を隔てた背後の誰かが言った。

「！？」

村上はその場違いに綺麗な声を聞いた途端、予想外な驚きで全身に衝撃が走った。

過去によく聞いていた声だ。

とある崇高で不良な師匠の元で、共に師事をあおいだ姉弟子。端的で女らしからぬ口調。
「……霙、だけど。覚えているかい？」
村上は俯く額を目を隠しながら押さえ、自嘲するように笑い始めた。
「ははは！　悪くない！　悪くないラストだ！　ついには幻聴にまでなったが、もう別に構わん！」
村上は笑い続ける。
歪んだ口に、村上の頬を伝った一筋の涙が届く。
村上はこめかみを押さえる指に力を込め、しまいには鈍く痛みだした。
そのとき、村上の額に重たく冷たい固い物体が落ちて来て、鋭い痛みが突き刺さった。
「ぐっ！」
さらに俯いた頭に、先程の何倍もの重量の冷体がぶつけられる。
「ぐはっ！」
後頭部の辺りで冷気が収束し、空気が凍っていく音が聞こえてきた。
「くそっ！」
村上は追撃を防ぐため、その空間に向かって腕を振るった。
固く冷たいものとぶつかる。
反射的に掴み、凍るように冷たいそれを見た。
「氷……？」
拳よりやや大きめの氷が手には握られていた。
既視感がした。過去にもよく、このような事をされた記憶があった。
「ああ、なるほど」
霙だ。まだ師匠の元に二人がいた頃、村上が修行をサボっていると、よく霙はこうやって頭に氷を降らせてきていた。
「幻聴なんかじゃないよ」木の向こうの霙が言った。

村上は氷を手で遊びながら、再び木の根本にへたりこんだ。
「ああ。幻聴なんかじゃないな。懐かしいことをされた……。それに……久しぶりに会ったな、霙」

第一部　定義（１９）

「……そうだね。最初、君の姿を見つけたときは正直、驚かされた。なんでここにいるんだろう？　でも、君が納藤と一触即発の雰囲気で話をしているのを見て、ピンときたよ」
「……止めるなよ」
　霙がクスリと笑った。
「君は変わらないなあ」
「ぐ……」
「君を止めるつもりはないから安心してよ」
　村上は呆けた顔になった。
「……意外だ……」
「……え？」
　村上は手の中の氷をしげしげと眺める。
「霙の性格なら、私のことを止めるかと思っていた。昔、よく考えずに突っ込んでいた私に、霙はしょっちゅう文句を言っていたからな。今では理解できるが、あの頃の私はそれに反発して喧嘩になったな……」
「ああ。そういえば、君はいつも先走っていたね。言っても聞かないんだ。口癖にもなるさ、それは」
「……霙。お前は随分と変わったな……。言ってくれ。何がお前をそんなにも昔と変えさせたんだ？」
　単刀直入に問い掛けた。霙の姿が見えてはいないが、逡巡する顔が思い浮かぶ。
「そうだね……。何か変わったかと言えば変わってるかも。だけど、私は何も変わってなんかいない。私は今まで通りに、あなたに小言を言いに来たんだよ」
　霙はそこで言葉を切ると、溜息混じりに葉と葉の間から覗く満月を見上げた。

一本の木を挟み背中を合わせて地面に腰掛ける二人が、月明かりによって闇の上に鮮明に映しだされた。
「最近、霊媒師が何者かによって殺されて回っているって聞いたんだ。共通点が見つからずに不可解極まりない事だ、って。でも、彼らは皆、翔人と私には関係のある人なんだよ。師匠が死ぬ原因となり、私が、この腕に霊を宿す原因ともなった人達」
悲しみに溢れた記憶の一面が脳裏に蘇る。
村上は、腹部を半分無くした師匠の血まみれで衰弱しきった身体を抱き、霙は師匠の真っ赤な手を握ることしかできなかった。
「あなたは、まだ殺し続けるのかい？」
村上は目を逸らすかのように目を細めて手の中の氷を見つめるだけ。
閑静とした夜の森には、月光と霙の静かな声だけが漂う。
「激情に身を任せてはいけない。身を亡ぼすことになる。私は……、それが悲しくて堪らないのよ……」
気まずい沈黙が二人を包み込み、村上は一層顔を上げづらくなった。霙は背後の木の反対側にいて、村上の顔を見ることはできないというのに。

第一部　定義（２０）

村上が特定の霊媒師を殺して回っているという霙の憶測は全て間違いなどではない。師匠の敵、霙が日に日に命を削らなくてはならないという事実。それらの因果を断つために、ただがむしゃらに復讐し続けていた。

だが、村上は理解していた。気づかないふりをしていても、気づいているものは気づいている。この復讐は何の意味も成さず、遅すぎた決断であるという事を。

彼女達を救うのならば、縄張り争いに夢中の、肥えた年寄り霊媒師が霙に理不尽な言い掛かりで傷をつけたときに、霙を救うべきだった。そうすれば、今とは違った運命を辿っていただろうに。霙も師匠も無惨な運命に行き着くなんてこととは違う。

霊媒師を一人殺し、復讐を徐々に完遂するごとに、村上の身体には空虚さが浸透した。師匠から譲り受けた、右手にはめた形見の黒い革手袋が深紅に染まるたびに、彼の心に堪え難い虚しさが流れ込んで満たした。

決断が遅すぎたためだ。村上が怖じけづかず、震える脚をただ少し前に踏み出せば、霙も師匠も助かった。

「私はもう、ここを発つつもりなんだ」霙が言った。

村上にはどうしても、その声が達観した諦観が含まれているように聞こえてならない。

「ここには私の目的に合うものはないみたいなんだ。だから、ここを発つ」

ここにきて、霙が昔のように村上を止めない理由を村上はようやく理解した。

村上は霙を救うこと、それを目的としている。ならば霙を助けるものがないならば、この地に留まる理由はない。納藤と張り合う理由もない。

「……霙……、お前……」
「夜明け頃には発つよ。またしばらく会えないかもしれないけど、まあ元気にやっていきなよ」
「駄目だ。まだお前には、ここには大きな可能性が残っているだろっ？」
つい村上は語調が荒くなってしまった。
「無いのと同じじゃないかな。私はこうすることが、最良の選択肢だと思って選び取ったんだ」
霙は村上と別けた師匠の形見である黒の革手袋をはめた左手を見つめた。革手袋の下の真っ白い左腕の中では、夕方に一人の少年の額を掴んだときに活性化した霊が疼いている。
「情報を一握り捨てることはもう決心した。もっと大切なことなんて他にたくさんあるからね」

第一部　定義（２１）

霙はすでに固く決意を抱いていた。
村上はまた決断が遅延している。今退いてはいけない。このままだとまた救いのない運命を踏むことになってしまう。
――――覚悟くらい決めなくては……！
村上は気力がすっかり抜け落ちた体を振り絞り立ち上がった。持っていた氷の固まりが地面に転がった。激痛が後頭部に走る。
だらし無く寄り掛かっていた大木を回り込み、裏側にいた霙と顔を合わせる。
月光の中、フードを外していた霙は目を若干見開いた。随分と久しぶりに見た姉弟子の表情。村上はなぜか胸がチクリと痛んだ。
村上は霙の目の前にしゃがみ、ちょうど霙が顔の前に上げていた左腕を掴み取った。
「ちょ、ちょっと翔人！？」
この左腕には死と同意義である霊が宿らされていることを思うと、先程感じた痛みとは違った痛みが胸を駆けた。
左手にはまっていた自分の黒い革手袋と対となる、霙の革手袋を外した。異常に白い左手があらわになった。ついで村上は自らの右手の革手袋を外す。
村上は自らの右手と霙の左手を重ね合わせた。
途端、強烈な悪寒が全身を突き抜ける。
生あるものとは真逆の世界。そこの存在である霊に直接触れたときに味わう特有の感覚だ。
村上を死の感覚ともいえるそれが絶え間無く襲う。
「がああああぁぁっ！！」
思わず叫び声を上げてしまった。
今村上がしていることは確信を持ってはいたが、賭けだった。失敗する確率を拒むことはできない。

しかし、だからと言って立ち止まるわけにはいかない。断ち切るわけには絶対にいかない。もう二度と、怖じ気づいた後悔などしないために。

「翔人！　早く離れないと……！」

霙が声を張り上げた。

霙は握られていない右手で、村上に掴まれている左手を外そうと伸ばす。

そのとき、霙の手と村上の手の接合部分から漆黒の影が獰猛に噴き上がった。

「くっ！」

霙の右手が暴れる影に弾かれた。

「霊が私に攻撃するなんて……、翔人の体に乗り移る気なのか！？」

霙の左腕の中を何かやたらと冷たく重いものが手の平の方へと抜けていく。手の平からはどす黒い影がのたうちまわれるように噴き上がっている。

「翔人！」

「あ〝あ〝あ〝！」

霙の左腕に存在を認められた霊を、村上の右腕に移す。霙を死の苦しみから解き放つと同時に、村上の自分自身への戒めとして。

「がはっ！」

村上は吐血した。

口の中に広がる鉄の味。

生者の体内に死者の存在を認めるなど、とても生きていられるような苦しみではない。

霙はこんなものを体内に抱え、毎日を過ごしてきた。それを強いたのは、紛れも無い自分。あのときあの瞬間の決断が彼女を苦しめている。

もう、霙一人に苦しみを耐え抜かせる真似はしない。

あのときもこうしてさえいれば、こんなに苦しむ必要などなかったのだ。これは愚行が招いた必然的痛みといえよう。

ならば霙がこの苦しみを背負うなど、甚だしいにもほどがある。
霙を救うために、自らの戒めのために、これを背負う。
そう決断した。
「あああ！」
――――天地が逆転した。
――――暴風が巻き起こった。
――――暗闇が襲いかかってきた。
「ああああああ！！」
――――体内を獰猛な影が食い破っていく。
耐え切れない痛みに意識が飛ぶ――――。
瞬間――――。視界が一斉に晴れた。
くすんだ視界が広がる。
「はあ、はあ、はあ……」
乱れた呼吸をする。
頬を伝う汗がすぐ頭の横の地面に落ちる。
いつの間にか仰向けに倒れていたらしい。見上げる夜の闇の中、揺れる木の葉の合間から、何事もなかったかのように静かに光を放つ満月が見えた。
突然、人型の影が満月を隠した。暗くて霞んで、顔はよく見えない。
一雫のほのかな温かさを持つ雨が降ってきた。一滴、また一滴と村上の頬を濡らす。
今度は聞き慣れた声が届いてきた。
「バカっ……」
また一雫の雨粒が村上の頬をうつ。
頭に温かい腕が回された。村上の冷えきった右腕なんかとは違う。
「バカっ、……」
月光が照らす森の中、頭が誰かの胸に抱き寄せられた。
今の村上には、この温かなぬくもりがとても嬉しかった。
「ばか……」

冷え切った体に、心地良くその言葉は滲み渡っていった。

第二部　少女の空想（1）

第二部　少女の空想

一体そこはどこなのか。
産まれた場所がスラム街という特殊な空間であるということを、私はいつからか無意識に理解はしていたが。
私はダンボールと廃材でできた簡素すぎる家で、兄と二人暮らしだった。
両親は初めからいなかったのだと思う。なぜなら、彼らの顔を見たことなど一度もなかったから。
夕焼けの向こうに父親と母親に手を繋いでもらっている幸せそうな子供を見かけたことは幾度となくある。そのたびに両親は初めからいなかったのだと思うようにした。
たった一人の家族である兄は優しくて、私のヒーローだった。
よくわからない大きな人達に私が囲まれて動けなくなったときも、兄だけはいつでも連れ出してくれた。彼が私にはとても眩しくて、彼と一緒にいるとき、私の心はいつも黄金色だった。
無為自然に過ぎ去る日々の中で、彼の背中を見て私は育った。
だけど、死という概念は遠慮を知らずに横槍をいれてくるらしい。
雨粒が地を激しく叩くとある日の夜中。一人の少年を私は見かけた。
傘もささずに雨にうたれるがままの少年に近づいた私は彼に問いかけた。どうしたのだ、って。
彼は応えなかった。代わりに私は背後から誰かに乱暴に引っ張られた。
誰かに後ろにとばされた私の目の前には細身の男が立っていた。

男は早口にぶつぶつと気味悪く呟いていた。
不意に、少年の足元が奇妙で規律のとれた円状に光った。
暗い雨の夜を照らしあげるその赤黒い光は、よく見えていなかった少年の顔を映し出した。
雨のせいだろうか、あのとき少年が泣いていたように見えたのは。
少年は頓着ない表情で私を見ていた。だけど、どうしてもその目は僕を助けてくれと、僕をここから連れていってと私に訴えているように見えた。
きっと雨のせいだったんだ。だって、あのときの雨はいやに肌に張りついて気に障っていたから。
私は飛び出していた。
少年を両手で円の外へと押し出していた。
彼から変な気分みたいなものが乗り移ってきて体内に寄生してきたけど、私は気にしなかった。雨の方が鬱陶しかったし。
急に私が気持ち悪くなったのはそのときだった。
体が重くて、立っていられなかった。もちろん私は倒れたんだと思う。
悔しかった。兄のように誰かの手を握ってあげることができなくて。
未練がましい。あのときの私はその一言で説明がつく。
唐突に私の体が消え始めた。
足の末端が光った。そして徐々にそれは広がっていった。
霊となった———ちょっと特殊だけど———今では何が起きたのかわかるけど、あのときは何がなんだかわからなかった。それでより強く生きたいと思ったのかもしれない。
とにかく私は生きたいと望みながら白い影みたいな光になって消えていった。
あの気に障る雨粒は肌に触れることなく通り抜けていった。そのせいで言い訳を当てつけるものがなくなってしまった。
だけど、途中でいきなり私が消えていくのが止まった。

希望みたいなものが見たくなった。それで最初に消えていった脚を見たけど、消えていった脚はちゃんと消えていた。それでも助かったんだと、胸を震わせた。

そのとき突然、白い光になる代わりに私は一気に黒い影となって消えた――――。

わけがわからず、消える最中、私は私の運命にただ怒りが湧いた。

そして人生のやり直しを欲した――――。

第二部　少女の空想（2）

＃

「アリサ？」
快晴の涼しげな朝の中、一央と有里沙は森のふちを歩いていた。
「アリサ？」
一央はもう一度有里沙に呼びかけた。辛気臭い顔でずっと考えこんでいる。
朝、家を出て学校に登校する途中の今までずっとこの顔つきだ。斜め下の地面とばかり睨めっこをしている。
昨日も急に黙りこんでいたこともあって、一央はだんだんと好奇心がおさまりきらなくなってきていた。
「えいっ」
物思いにふけりながら歩いていく有里沙の後ろに一央は回り込み、彼女の肩を揺すろうと腕を伸ばした。
そのとき、何を思ったか、急に有里沙が立ち止まった。
「え〝っ」
一央は目の前を歩く有里沙について行きながら腕を伸ばしていたものだから、そのまま彼女にぶつかる。一央の顔面と有里沙の後頭部が衝突する。
「っ……！　痛いぞ……！　いきなりなにをするのだ」
思わぬ打撃を受けた後頭部をさすりながら有里沙はふりむいた。
「ご、ゴメン……。こんな予定じゃなかったんだ……」

「予定？　予定がどうしたのだ？」
鼻先が赤くなり目の端に涙をたたえてしまっている一央に有里沙は近づく。邪気のないくりくりさせたツリ目でのぞきこんでくる。
「な、なんでもないヨ？」
一央は思わず目を逸らし、頬を指先でかいた。
有里沙がさらに詰め寄ってきた。目を細めて本来の若干ツリ目気味の状態にもどす。
「ほ〜。何もないのか……。ならなにをそんなに焦っているのだ？」
「ＨＡＨＡＨＡ。紳士たるオレが焦る？　何をバカな……」
額に手をやり頭を振る一央。
「君も少し落ち着きたまえ」
一央は有里沙の肩に手を置いてさりげなく距離をとる。なんとなく近くいられると内心がばれてしまいそうな気がしたのだ。
「それじゃあ一体なんで私の後ろにいたのだ？　」
「うっ」
「私の頭とぶつかるほど近かったではないか？」
一央の有里沙を押さえている腕を払いのけて、彼女はぐいぐい近づいてくる。一回り小さいはずの彼女は、詰め寄られる一央にはなぜかとても威圧的に感られる。
「というか、カズ。さっき私のことをバカって言ったような気がする」
苦笑いをする一央は胸元に両手をあげてたじろぐ。
「バカってアリサに言ったつもりはないけど。その、ゴメン……」
別に謝るようなことは――――まだ――――していないが。
「……」
有里沙は身を引き、腕を組んだ。そして彼女は少し涼しすぎる朝の空気の中、一央に背を向ける。
――――そんな怒られるようなことしたかな……。
そんな有里沙の背中を見ると、どこか元気が欠けているように見える。

「カズ。学校に行くのではないのか？」
首を曲げて振り向く有里沙にそう言われて、一央は有里沙の傍らに駆け寄った。
一央はそっと有里沙の横顔を窺った。早朝の空気に晒され続けた頬はほのかな赤みを帯び、どうしてか真剣な表情をしている。
自らに向けられる視線に気づいたのか、こちらを向いた有里沙とばっちり目があった。
「……」
「……」
「へん。最近のカズは変だ」
しれっと有里沙は会話相手にお前は変わっている、と言いのけた。

第二部　少女の空想（3）

「わたしの顔に見ほれちゃったらだめだぞぉ～、こらぁっ」
有里沙がなんとも可愛らしい声でそんなことを言うと、人差し指を一央の頬にグリグリと押しつけてきた。半端なく痛い。
「あたっ！　痛いってアリサ。ちょっとタイム！」
痛みに呻く一央は押しつけられる有里沙の手を掴んで引き離す。頬は一点だけ極度に赤くなっていた。
「んっ、どうしたのだカズ？　もっと喜ばないのか？　なら特別にもっとしてやろう！」
有里沙は再び一央の頬を指先でグリグリとしようとする。
この展開を、一央はよく知っていた。一人の先生が裏で策を巡らせ楽しんでいる。一央は既視感バリバリだった。
「いきなり何かと思ったけど……、カオリ先生だよね、また……」
頬に指を突き立てられないように有里沙の両手を一央は掴み、ため息をついた。
有里沙が男女間の事柄に疎いことをいいことに、歌緒里先生はよくこうやって有里沙にあられもないことを吹き込む。そして実行に有里沙は移すわけだが、きまって被害者はいつも一央だった。
……嫌なことばかりでもなかったけど……。
「いつも言うじゃないか。カオリ先生の言うことを鵜呑みしたらいけないってさ。あの赤髪ヤンキー姉さんは自分だけが楽しんでることばかりなんだし」
「？　自分だけなのか？」
「まあ、あんな性格だしね……」
遠くを見るかのように一央は目を細めた。
一回り小さい有里沙が一央を見上げてくる。
「私も楽しいぞ？」
「あのね……」

一央には、理解能力も記憶力も、ましてやカンもたまに鋭い有里沙がどうして歌緒里先生の言う意味不明なことをするのか、今だに理解できていなかった。
「前やられた寝起きのベッドに乱入よりはまだマシだけど……。というかよく懲りずにアリサもやるよね……」
「楽しいからな！」
えっへんと有里沙は胸をはった。
――――というか楽しんでやっていたのかよ……。確信犯じゃん……。
「まあアリサが元気そうでよかったよ。昨日から元気なかった感じだったし」
はっはっはと笑っていた有里沙が口を閉ざした。腰に腕をあてたままだが、胸をはるのをやめる。急にしんとなった有里沙に一央は焦りと不安を覚えた。
「アリサ……？　ああ、ごめん。そんな深い意味じゃないんだ。気にしないで」
と、両腕をだらりと下ろした有里沙は先程とうってかわってまじめな雰囲気を醸し出し始めた。
「少し、夢を見たんだ。昔の夢を」
俯いた有里沙から呟かれた言葉は、予想の斜め上をいった。それほどまでに唐突の一言だった。
有里沙と一央は幼なじみだ。当然、一緒にいた時間は長い。よく思い出せない箇所が多いが、有里沙がそんなに悩むようなことはない気がする。
あるとするならば、あのときの交通事故か。だが、あのときに事故が起きたのは一央宅で、有里沙の小林一家ではない。
「昨日悩んでいたのとは関係ない。……あ、いや、過去というのでは関係あるが……。とりあえず、色々と昔の出来事を思い出して、少し混乱しただけだ」
有里沙は物憂い様子で言うと、黙りこんだ。

一央は言葉が出なかった。ただ、目の前の有里沙を見ていると今日の家を出るときに母と交わした会話が思い起こされた。
――今日、集会場の近くにある教会の辺りでお祭りがあるらしいわよ？　アリサちゃん誘って行ってくればいいじゃない。若いんだし～。
目の前の有里沙はどう見てもどこか元気がない。お祭りに行くのは、憂さ晴らしにもちょうどいいかもしれない。なんのお祭りだかは知らないけど……。
淋しげに下がっている有里沙の手。一央はその手を握った。俯いていた有里沙は驚いて顔を上げる。
「……！　どうしたのだ？」
「今日は学校サボっちゃおうよ。どうせまたつまらない授業ばかりなんだからさ」
「さぼる？　さぼるとはなんだ？」
「とにかく遊びまくるってことさ！　教会の近くでお祭りがやってるんだ。行こう、アリサ？」
一央は有里沙のその冷えた手をひいて走りだした。後からつられて有里沙も来る。
「ちょっ……！」
振り向いてまばゆい笑顔を向ける一央の顔を見ると、なぜだか有里沙は胸が苦しくなり何も喋れなくなった。
心なしか、有里沙は体がほてってきた気がした。

第二部　少女の空想（4）

#

「今日、集会場の近くにある教会の辺りでお祭りがあるらしいわよ？　アリサちゃん誘って行ってくればいいじゃない。若いんだし～」
「お祭り？　そんなのあったっけ？」
「あったわよ。あなたが気づかなかっただけだけど、何年かに一度のお祭りだからね……。気づけなかったのはしょうがないか。これの前はたしか、あなたがまだ学校に入る前だったかな？」
「オレに聞かれても……」
「とりあえず行ってきなさい！　理解できないわ。可愛い幼なじみがいるのに定番すぎるお祭りに連れていってもやらないなんて！」
「定番って何の定番さ」
「とりあえずまず家を出なさいよ。アリサちゃんはあなたのことをずっと待ってるわよ」
「引きとめたのは誰さ……。まあいいや、行ってきます」
息子が目の前の玄関から肌寒い外に向かったのを見送り、大嶋加奈子は肺に意味もなく溜まっていた空気を吐き出した。
「ほんと、鈍いわあの子。まったく誰に似たんだか」
背後の開けはなたれているドアから誰かが出てきた。まともに寝ていないのか、夜明けだというのにその顔には隈ができている。
「感謝します、加奈子さん」
納藤倫がドアに寄り掛かりながら言った。

「これでオレも一休みできる……」
倫はそう言うと、その場にずり落ちてあぐらをかいた。
結局、有里沙を部屋に戻してベッドに寝かせた後、夜通しで彼女と一央の部屋の周りで警戒していたのだが何かが起きるということはなかった。
ただ何もなかったのはいいが、あの夜に莫大な量のエネルギーを使い魔術を行使したのにはかわらない。その上徹夜したものだから、倫の体は疲れきっていた。
「ふう」
体を壁に預けて頭を傾ける。
「へー、珍しくずいぶんとお疲れなのね。いつ以来だったかしら……。アリサちゃんが消えそうになったときも倫、あなたは今みたいにぐだっとしていたわ」
「はは。なんてこと記憶してるんですか。ま、正確に言うと、アリサが消えるわけじゃなく、あのときはこの村の全員の命がヤバくなりかけてたんですけどね」
「今回もヤバい？」
昨夜の月明かりに照らされた光景。あのとき有里沙本人から、彼女は二重人格であると聞き、さらにこれから何かを引き起こすだろうとも宣告された。
さらに付け加えて、鳴海霙、村上翔人とその背後の者の動き。村上と対峙した際に感じた、黒幕の冷気と霊力。ただ者ではないのは疑いようもない。
「ヤバいですよ。超ヤバい」
「またアリサちゃん存続の危機？」
「あー……。どうなんだろ……。ただ何者かが彼女たちに接触をはかろうとしているのは確かです。下校途中二人っきりのときを狙ったかのように霊が出没したなんて、故意的にしか思えない。なにしろアリサ本人が霊ですから……」
「ああ、わかったわ。だからカズとアリサちゃんを祭に行かせたの

ね」
加奈子は合点がいったようにぽんっと手をうった。
倫は「ええ」と頷いた。
「いくらなんでも衆人環視の中で派手なことはしないでしょう。学校でもまあ人数はいるにはいるんですが、そろそろ……」
「そろそろ？」
倫はなにやら気まずそうな渋るような顔つきで頭をわしゃわしゃとかいた。
「ほら……。二人の仲にもそろそろ進展があってもいいかなって……」
照れるように言った倫を見て、加奈子は思わず笑い出してしまった。
「あははは！　ほんと、今日の倫はなにかと珍しいわ。レアモノ倫よ！」
「え……。だから言いたくなかったんだ……」
倫はそっぽを向いた。顔は見えなくなったが、おそらくは赤くなっているだろう。
加奈子は笑いを堪えながら話を続ける。
「いやいや。悪い意味じゃないわよ。へー。普段は結構とそういうところに無頓着なくせに、今日はいやにしおらしいわね。じゃあ頑張んなきゃだね、倫。今回も頼りにしてるわよ。私の息子と彼女を、恋路を邪魔しようとする人たちからどうか護ってちょうだい」
倫は振り返り、加奈子に向かって言った。
「わかってます。カズとアリサは、オレが絶対に護ってみせます」
朝日の中、倫は微笑んだ。

第二部　少女の空想（5）

＃

結局、一央と有里沙はバスに揺られて教会まで行くことにした。
バスは早朝に一回と昼間に一回、それと夕方の二回を合わせて計四回しか走らない。大分遠くにある都市部から、ベッドタウンにすらなりえない片田舎に向かうのだから少なくて当然だ。
バス停は村の中にもいくつかあり、一央と有里沙の二人は教会の近くの集会場前で降りた。
「大分混んでるなー」
祭の余波は集会場まで影響しているのか、ちょっとした人混みができていた。
ぽつんとたっている屋台に立ち寄る夫婦。集会場の前で立ち話をする人たち。いかにも祭があります、という雰囲気だ。いやがおうでも一央は祭のムードに浸透されていく。
「なんか楽しそうだよアリサ」
「そうだな。なにやら盛り上がっているみたいだ……」
ふわふわと軽い足どりで人混みの中に入っていく。
どうやら教会に向かうにつれて屋台も増えていくらしい。有里沙は吸い寄せられるようにチョコバナナ売り場に行っては、今度は焼きそばへと手繰り寄せられる。
「なんだかウマそうだぞカズ！」
「そうだよね……。というか正直、こんなに立派な祭だなんて思ってなかったよ」

どうやらこんな小さな村でも盛況な祭は開けるようだ。村のあちこちから集まったのか、こんなにも村人はいたのかと信じられないほど人がいる。まるで村を挙げて何か一つの事柄を祝っているみたいだ。

と、その瞬間一央の前に赤い物体が突き出された。

「ほらカズ。カズのぶんもとっといてあるぞっ」

よく見ると、それはりんご飴だった。有里沙が一央に突き出している。

「あ、ありがと。ってお金は？」

だが時すでに遅く、有里沙はさらに奥の屋台に行った後だった。

「兄ちゃん」

肩をとんとんと叩かれて、振り返るとりんご飴の店主らしきお爺さんがいた。

「ってあれ？　おじさん？」

そこにいたのは白髪でオールバックの見慣れた顔。通学路にあるコンビニの年寄り店主だ。

おじさんがニヤリと笑って一央に話しかけてくる。

「おうカズ。なんでこんなとこにいるんだ？　学校はどうした」

「えーと……。と、とにかくそういえば、おじさんこそなんでここにいるの？　コンビニがら空きなんじゃないの」

「もちろんがらんのどうだぜ。ま、盗みに入るようなやつはいないだろ。なによりオレはこの祭に来たかったんだ。ちょっとした思い出があんのよ」

腕をくんでうんうんと頷くおじさんは、頭にハチマキを巻いていた。なぜりんご飴でそんなにむさ苦しい格好をするかは謎だったが。

ところで、とおじさんは話を切り出した。

「なんで学校も行かずに祭に来てんだ？　というかよくこの祭があること知っていたな、カズ」

おじさんは大事なことを忘れてはいなかった。

おじさんはちらっと、先走って行った有里沙に目をやると、はは

ーんといった様子で目を輝かせた。
「なるほど。窮屈な学校を抜け出して、愛し合う二人でお忍びデートってわけかい。愛の逃避行かー。なるほどなるほど」
「デート！？　ち、違うよ。ただそのなんというかアリサがほら色々と悩んでるからというかなんかできないかなというかほら……。えーと……」
あやふやに身振り手振りをする一央を見て、おじさんは笑いをこらえるかのように口を歪ませた。そして力強く一央の肩を叩いてきた。
「そうかそうか。あくまでもアリサのためか。なんの進展のないお前らを見て少し不甲斐なさすぎるだろと思っていたが、やるときはやるじゃねえか」
おじさんはばっしばっしと一央の肩を叩く。どう考えてもこれは痛い。
「ならりんご飴の代金はまけといてやるよ。なにせこの祭は特別だからな。っくく……！　まあせいぜいがんばれよ！　あと教会前の広間には絶対に行っておけよ。こいつは見逃したらいけないぜ。アリサのために、な」
そして一央の肩を両手で掴んでぐるっと半回転させると、背中を人混みの中に押し出した。
「明日を楽しみに待っているよ！」
一央の背中におじさんの声がかけられる。
明日を楽しみにする理由はわからないが、この祭が終わった後のことをさしているのだと思った。
目の前の人混みを掻き分けていくと、すぐに有里沙は見つかった。
有里沙は振り向いて、一央に手を振る。反対の手にはわたあめが握られていた。
「カズ！　早く来ないと置いていくぞ！」
人混みの中、有里沙は満面の笑みを浮かべた。
「はいはい」

一央はそう呟くと、有里沙に駆け寄った。
彼女はおてんばで子供っぽいけど、別にそれに付き合ってもかまわないと、一央はなんだか思えてきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3315l/

Joker oF Way

2010年12月8日21時55分発行